ツ
385

思想の日本

天涙居士著

東京
警醒社書店

思想の日本

天涙居士著

東京
警醒社書店

明治
39 9 17
内交

はしがき

この論は、民族心理の見地に立て、我が國民性（ナショナリティー）を觀じ、更らに眸を轉じて、基督教を形成せし過去の文明と、基督教の生める今日の文明とを考察し、かくて一方に於ては、國史上、外來文明の結果に鑑みて新來の歐洲文明の根本精神（即ち基督教）は如何に我國民を感化し、其の民族心理學的特色の那邊まで感化力を逞うすべきかを見、他方に於ては反面より、過去の外來文化は我が國民氣質の偏傾の爲に如何に變化されしかを見て、新來の文明の精神を那邊まで同化すべきかを知らんが爲めに、此等の正面と反面との觀察に必要なる材料を蒐集し、宗教、哲學、社會統制學、特に社會倫理學等の上より、章を分ち編を改めて一々其結論を提げ來り、終りに至て之が大總括を

なさんとの最初の願望に驅られて、禿筆を呵したるものなりしも、當今大著述家先生都市に遍うして、紙價の如何亦少しく思ふ可きものあり、且つや考察の多岐に亘り、研究の多端に流れて、論議の乾燥を致さんも、大多數の讀者にとりて却て喜ぶ可きことにしもあらざる可しと思惟し、故らに篇章を壞つて無系統の一氣呵成文となし、讀者の鋭敏なる眼光を恃み、紙背の異色一々自から顯然(クリヤー)且つ判然(ディスチンクト)たるに至らんを期することゝせり、江湖の批判は余の樂しみ且つ待つ所。

或曰、本書は寧ろ「日本に於ける宗教の將來」と題すべしと、余も然か思はざるにあらず、然かも余が眼中には、日本に於ける全宗教の將來は、世界の上の基督教の將來と同樣に映じ來るを如何せん、蓋し或は日本を以て二十世紀文明の改造者とし、文明史上東西の兩思潮の調和者と爲すより來れる余か謬見(?)の致す所なるか否か、敢て世運を知るの健兒に問ふ。

天涙居士

思想の日本

目次

◎祖國上古の風喜ぶ可し◎理想の女性◎理想の男性◎インドユーロピヤンとセミチツクとの文明の特色(一)其差異の根本的なるもの——人種の性情の不滅なること物理學上エチルギーの不滅なると同理なること(二)兩人種の起原——有史以後の對立(三)ヘブリユーとグリーキとの文學上の差異——其の哲學宗教上の思想の相違(四)兩文明の調和成らんとす(五)外界と國民性との關係——(イ)スパルタ及びアゼン(ロ)ヘブリユー(ハ)日本◎日本の民族心理を國史上にて觀察す——(一)東亞大陸文明を容れたる時代(二)孤立時代(三)歐洲文明を容れたる時代◎歐洲の精神的文化は如何にして同化せらるべきか——之を

トする所以の方法◎建國的元氣と仰上の感情は國家の生命なり◎衰退的國家と隆盛的國家◎今日の日本は過渡期にありといふの眞意義◎新國民倫理主義は何によりて形成せらるゝか◎其の新主義の形成されし時わが國萬般の有樣は如何◎特に宗敎は如何に變化すべきか——神道と佛敎との經歷◎佛敎の將來◎將來國民の宗敎となり得るものゝ資格◎基督敎擴布の前途——傳道に最良の方法◎基督敎の榮ゆる分子と亡ぶる分子。

思想の日本

天涙居士著

祖國上古の風を喜ぶべし

吾人は宙目的に祖國自覺をなさんとするものに非ず、日本が一旦世界の表にあらはれて、萬國皆な其眸を屬するの日にあたつては、彼此の長短を明らかにし、以て將來の命運につき大に計るところなかるべからず。而して余の思想一たび斯くの如きことに向へば、心かならずわが上古を想ひ、深く其美を贊嘆せずんばあらざるなり。然りと雖乞ふ余を誤解することなかれ、余が上古を慕ふ所以のものは、厭世の徒が社會の煩はしきを嫌ふて思ひを純朴の上古に寄するの類にあらざるなり。彼等が上古を懷ふは退歩なるに、余が太古の日本

を懐ふは進歩なり、即ち彼等は上古の素朴にして其未だ發達せざるところを喜び、余は將來の發達を期するが故に上古建國の元氣溢れたるの時をよろこぶものなり。

凡そ創業の際にありては一切の形式の不完全は則ち免かる可からざるも、其精神に至りては守成の時代と比すべくもあらざるなり、守成の美なる所は平和なり、創業の美なるところは葛藤なり、史上この相異なれる二つの時代につきて見よ、守成のよく文物燦然たるを致せるは誠に史を讀むものをして快味を覺えしむといへども、しかも其の快味や、建國、革命、創業の、血を流し骨をさらすの慘狀の快なるに比せば、何人も其の興味の索然たるに驚かざるはなかるべし。吾もとより乱を好まず、又人生は爭鬪を求むるものなりと斷言するを憚るものなりと雖も、人てふものゝ感情は、コメディカルのことよりもツラゼディカルのことに感ずるの度つよきものにして、すべて人心の理想化したる一切崇高のこと、ことゝくツラゼヂカルの色を帶びざる者なき所以の理を知るが故に、余は目下の日本よりも維新の際の日本を喜び、德川三百年の太平に夢みし時代よりも、元龜天正の英雄割據時代を喜び、而して大宮人の奈良朝よりも、日本尊の太古を以て喜ぶべしとするものなり。

且つ夫れ、余が特に吾が國の太古を惝恍する所以のものは、啻だに其建國の元氣充滿したるが爲に然るのみにあらざるなり。彼等は今日の日本と異り、壯大と優美とを兼ね具へたり、今ま日本の民族の何々より成りて何れの時、何れの所より渡來せるか、吾人こゝに詳に論せずと雖、とにかく我が大和朝廷を建て、此太平洋中の一孤島に香ばしき一個の帝國を設けたる民族は、確かに戰勝の民、優秀の

民なりしなり、即はち彼等は朝暾の太洋の霧を排してあらはれたるが如く、多くの群がれる妖雲をひらき、星の如くに割據せる多くの英雄を鎭撫して、心地よく櫻花の鄕に其國をはじめしなり。かくて彼等の血は淸く且つ溫かにして、夙とに歌謠によりて其伉儷を求め、舞樂を奏して相和樂し、貴者と道にあへば逡巡して敬辭を呈し、或は跪づき或は頭をたれて、つぶさに恭敬の禮をなせり、而して當時海內未だ安からず、西に熊襲あり、東に蝦夷あり、時に蜂起して平安の樂土を驚かすことなきを保せず、故に山水の秀麗、過て斯民の心を蕩かすの暇なく、勤勉にして夙に舟を作りて河海を利用し、地を耕し馬を飼ひ、又た酒を釀し、石を以て種々の器具を作り、植物によつて衣食のことを爲すと共に、軍神を祭て弓矢とる名を汚さゞらんとし、狩獵を怠らずして著しく其勇武の氣象を養成し、兵器を

重んじて其勇敢の德を稱するなど、建國の元氣須臾もゆるぶの時あるなく、よく東西の猛敵をして其虛に乘ずること能はざらしめたり』されば女子に至るまで其心がけの殊勝なる、其勇壯活潑なる、而して其よく貞操を守れることの如き、之を平安朝時代の柔弱淫靡なるに比して吾人は其同一人種たるを疑はずんばあらざるなり、彼等は常に小さき懷劍を持ちて道義の爲には我身も殺し人も刺し、少しも未練の痕をとゞむるを見ず、彼等は綠りの髮を地にたれ、粉白を施したる美目の少女なり、而かも此外面の優しきに似ず、かの內心の氣象あり、若し眞に女性の美なるものを見んと欲せば、余は思ふ、わが太古の女子を措て他に求むべきなしと、而して若し又斯の如くやさしくてキッとしたる女性を男子が理想となすが如く、女性は威あつて猛からざる多情の英雄を以て理想の男性となすとせば、わが

太古の日本男子は、正に理想の男性の好標本なりといはざるを得ず。即はち彼等は赳々たる武夫にして稜々たる海國の骨を持ちながら、琴笛の如きを弄びて巧みに其纒綿たる情緒を奏で、みそひと文字をつらねて其楚々の調を成せり、其繪畫は淡々として邪なく、其建築は素朴にして奥ゆかしきものあり。思ふに美的の趣味と技能とは、山川の美によつて自づから斯の民の養はれ來りしところ、而して勇敢壯大の氣、亦た大に地理上の影響に關するなくんばあらず、天然も亦た斯の民に惠み深い哉。

次ぎに吾人をして斯の民の性情につき一層くわしく觀察するところあらしめよ、而して之が爲に今まづ歐洲今日の文明を孕める二つの人種の間に其類似の點を求めしめよ、其の二つの人種とは何ぞ、インドユーロピヤンとセミチックと之れなり。前者は印度の西北よりペルシヤを經て西に擴がり、後者はメソポタミヤの溪谷に近く住し、地中海の海岸よりシリヤに擴り、ヘブリユー、アラビヤ等みな之れに屬す。此二人種は全く其性情を異にし、從て其慣習制度を異にすと雖、其相待つて以て歐洲史を形ち作れる點に至ては則ち一なり。今ま其差異の根本的なるものを見んか、先づセミチックの方は著るしき膨脹力を有し、インドユーロピヤンの方は漸進の道に長せり、即ちセミチックは貿易航海宗教のごときことに長じ、インドユーロピヤンは古きを捨てずして而かも新をとるに長ず、科學、藝術工業の如きは後者が世界に貢献せしところなり。然り而して前者は常に保守的にして、よく膨脹進歩すと雖も改良のことなく、例へば深けれども狹しといふが如くなるに反し、インドユーロピヤンの方は淺けれども廣く、われ以外のものを能く同化し行き、其爲すと

インドユーロピヤンとセミチックとの文明の特色（二）北方の差異根本的なるもの

人種性情の不滅なること物理學上エネルギーの不滅なること同理なること

ころ變化あつて多方面の發達をなすなり。セミチックは之に反して一方面のみの發達をなす、たとへばアラビヤ人の戰爭における、ヘブリュー人の宗教に於けるが如きこれなり。

以上の相異は無論大体のことにして、巨細の點までかくの如き綜括を爲すは誤謬に陷るの本なるが上に、例へば基督教の如きも此二人種の思想の混合によりたるものにして、今日の歐洲人も判然此兩族に別つことを得ざるものありといへども、然れども、此相異せる兩思想の如きは新約舊約の書ありて明らかに其淵源を知ることを得るものにして、物移り星替て人種は如何に混合すとも、其心理學的模型は遂に消滅するの期あることなく、必ず人文の上に何等かの痕跡を留むること、恰かも宇宙間のエヂルギーの遂に無意味の消滅をなすことなきと一般なり。

余は是よりして右兩人種の起源につきて一考せんに、印度歐羅巴族(インドヨーロピヤン)は兎に角、中央亞細亞及西亞細亞に住みしものならん、當時此族すでに農業のことあり、家族制度の如きは其最も重んじたるところにして、婦女子も人としての權力を認められ居たりしこと、他の種族の之を物品の如くに取扱ひ、之を奴隷と一樣に驅役し、家族に少しの尊嚴もなかりしと同一のことにあらざりし也、かくて父たるものは、一家族の長として大權を有し、此大權の下に支配されたる一家は、又た全社會の一單位として之に從屬したりしなり、而して其中央亞細亞にありしもの、後に分れて二つとなり、一は東南進し、他は西北進して、其南せるは又更に別れて印度に入てバラモン等となれるものと、伊蘭に入れてペルシヤ人としてイラン文明をなせるものとあり、又其北せるものは、今日の所謂アトランチックレースとなり、

再分して歐の東西に據り、北にあつてはスラヴ、及びテユートンとなり、南にあつてはグリーク、イタリーとなりたり。次ぎにセミチック人種の方は、其言語の始まれるところ不明にして、未だ研究せられざれども、もしアッシリヤ語の研究明らかにならば、此人種の北方の部分は明らかにせらるべしといふ、而して今日の學者の推測によれば、此人種は元とアラビヤの中央及び北部に居りしならんといふ。而して此族にありては男子は男子として（家族の長としてにあらず）の絶對の權力を有し、女子は全く奴隷と等しく、其宗教は頗る嚴格なるものなりき、これ其天然よろしからずして、氣候炎熱土地瘠惡なりしによる者なり。其の崇拜する所のものも、日本人の太陽を崇拜すると異なり、星を崇拜して之を最高の權あるものとし、而かもそは峻酷の有權者にして大慈大悲の神にあらざりしなり。而

して天然かくの如くなりしが故に、久しからずして此人種は次第に分れて四となりぬ。かくの如きは凡べて有史以前の事に屬す。

有史以後、セミチック種及びインドユーロピヤン種の中にありて、よく其進歩の先鞭を著けし者を擧ぐれば、前者に屬する者には、アッシリヤあり、フイニシヤあり、後者に屬する者には、グリークあり、イラニヤンあり、而してアッシリヤはアケディヤンより其文化を受け、イラニヤンはアッシリヤより之を受け、フイニシヤは之をエヂプト、バビロンより受け、次で之をグリーキに及ぼしたるなり。故にフイニシヤは即ちインドユーロピヤンの文化の母なりしなり。かくフイニシヤがグリーキに文明を傳へたるは、フイニシヤ其れ自身の文明を之に傳へたりといはんよりは、寧ろ埃及の文明をグリーキに持ち運びたりといはん方至當なるべし。これフイニシヤは他國

の文化を己れに受けて之を生長せしむるに適せず、其土地の事情が貿易を主とするやうに至らしめたるに由るなり。夫れかくの如く、文明は植物の種子の風に送られて、其到るところに根を生じ花を開くが如く、甲地より乙地に、丙國より丁國に、移り行き又移り行くものなりといへども、亦た植物の全く其種類を異にして變生せざるが如く、其本質は遂に變はるものにあらざるなり。されば、セミチックの文明をうけたる者は、例へば一夫多妻を常とし、インドユーロピヤンの方は常に人權を重んずるの風あるが如く、而して其形式は異るもセミチックは常に絶對王國を建て、インドユーロピヤンの一たるローマの如きは之に反し、帝國は建設するとも絶對の王權は之を許さず、されば技術の如きもアッシリヤ文明の生ぜるものは、必ず其王の力を顯はさんが爲めにせるものにして、人民の爲にせるものにはあらざるなり、之に反して、インドユーロピヤンの生せる技術は、皆な公共のものゝ共に樂しむ爲めにしたるものなり。而して其かくの如くなる所以のものは、一は外來の刺戟によりて然る者なれども、又た其在來の境遇によりて、根本の精神を同くして末技の形式を異にせるの發達を爲すことあり、たとへば、アッシリアはメソポタミヤの河邊に住して開化に進むの便宜はありながら、河邊にあるの故を以て其開化充分に廣まるの可能性なく、遂に單調の發達をなし、海も遠く造船の材も乏しく、航海も不便なるが如き狀況にして、四面敵の圍むところとなれるを以て、自家防禦の必要上、自づから軍事上の發達をとげ、軍を以て四方を併呑し、以て一大帝國を爲し、所謂軍事的文明を成し遂げたるが如く、又たはフイニシヤがアッシリヤと全く其境遇を異にし、地は木材を產し、海は航海

をたすけたるが故に、盛に貿易をなし、資料を外に仰いで内に製作し、遂に工業の民となれるが如し。

而してフイニシヤは畢竟セミチック人種なれば、アッシリヤと其發達の形式は異るとも、其思想に欠如せること希臘と相反せるの點に於ては兩者遂に一たり、フイニシヤもアッシリヤも、之を要するに單調の發達なり、即ち狹隘なる文明なり、此等を統一して多方面の文明を花さかしたるはグリーキなり、ローマの如きも亦た然かり、只だグリーキは之を理想化し、ローマは之を實行化したるの差のみ、換言せば前者は文學技藝に於て卓絶し、後者は政治法律に於て卓絶せるの差あるのみ、即ち一は知と情との上に於て秀で、一は意志系統のプレドミヂートせるといふの點にて互に其異采を放てるのみ、其根本に於て其多方面の發達を遂げ、綜合的文明をなせるの點に於ては遂に一たり。而して若し、グリーキはフイニシヤのセミチック文明を受けて完成せるものとなさば、ローマはアッシリヤのセミチック文明を受けて之を完成せるものといふべきなり。

是を以て之を觀れば、其外來の刺戟又たは其境遇によりて、或は發達の形式を異にすることはあらんかなれど、遂に人種の本質特色は變るべきものにあらざるが如し、故にいよ〳〵之より進んで其文學哲學、及び宗教上の兩人種の相違を考へ、其神に關する思想の根本的相違を見了らば、吾人は飜つて我が日本の夫れと相照し合はせて、以て文明史上の智識より、我國に於ける基督教の將來をトせんと欲するものなり。

（三）ヘブリユーとグリーキとの文

ヘブリユーは、基督教の產出地なるを以て、吾人はセミチック人種中より此族を擧げ、更らに之と好對をなせる希臘をインドユーロピ

ヤンの中より擧げて、而して今ま先づ其の文學の上につきて相比較せんに、抑も古代の文學の中にて大文學と稱すべきものは、この兩國の文學を措て他にあること無かるべし、そは文字の量多くしてよく思想の妙を寫せるの故にあらず、其よく後來の文學を起すの因となり其刺戟となりたるが爲に言ふのみ。而して此兩國の文學、各々其得長を異にし、ヘブリユー文學はグリーキ文學に有せざる特色を備へ、之よりして今日の文學を起せるものなると共に、希臘文學も又た別に其長所ありて、ヘブリユーの峻嚴崇高なるに反し、輕快にして雅致に富めり、これヘブリユー人は意志系統のすぐれたる國民にして、人格てふことに重視し、其目に映ずる山川草木は悉く生ける神の如く思はれて、美的のことも道念を滿足せしめざれば以て快となさゞるに反し、希臘人は例へば無邪氣なる嬰兒の如く、無關心

に其秀麗なる天地山水の美景に接し、美は美として絶對の價を附し、善も眞も、美即ち調和にあらざれば未だ以て其價なきものなりとなすが如く、之を要するに情の系統大に卓越して他の系統を沒却せるの理に由らずんばあらざるなり。

然り而して文學は第一に言語によりて表はさるゝものなるが故に、今其相違を見ざる可からず、まづ第一に異るは、語彙のことなり、語彙もし多からば智力に勝るゝも感情に劣り、感情に劣らざるまでも其內容の深からざるを示すものなり、所謂多情なれども、濃情ならざるの証據なり、之に反して語彙もし乏しからば、其國民は智力上細かなる區別は出來ざるも、綜合的たる情の一面に於て秀でたることを示す所以にして輕快趣味に乏しく、深酷慘憺の度に於て勝ぐれたる感情を有するの証據たるなり。而して前者は正にグリーキの

ことにして、後者は即はちヘブリューのとに當れり。次ぎに其國語の性質につきて言はんか、ヘブリューの方は多く感覺的にて記號的なるに、グリーキの方は精神的なり、たとへばヘブリューにて「高慢」といふは、『頭を上ぐ』といふ語を以て之に代用し、「怒」るといふ語は「呼吸を早くす」といふにて之を言ひ表はし、又た嫌ふといふは「顔を下ぐ」といふ言葉もて其意を通せるが如く、凡べて具体的なるも、グリーキにありては、それ〴〵抽象の言葉あり、こは獨りヘブリューとグリーキにつきてのみ言ひ得ることにあらずして、セミチック人種とインドユーロピヤン人種を通じて大般其然るを見るといふ、其文法の如きも、かの兩國にては大に其趣を異にし、ヘブリューにては語尾の變化も乏しくして一体に單純なるに、グリーキは獨逸語に見るが如くに多くの語尾變化を有し、時の變化の如き、頗る面倒なるものあり。かく文法上にても、一は簡單にして直覺を以て滿足するに、他は複雜にして修辭を尊び、主觀的に悟入するを以て滿足せず必ず他人に有効に其意を通せんことを期するにより、後ち詭辯家の徒出でゝ言語の爭ひ漸く盛んなるを致せることあり。されば、ヘブリューの哲學者又た碩學ともいひつべき思索家は、いづれも皆な豫言者にして、彼は其直覺を以て直ちに教義となして人を服し人を化するに反し、グリーキの思索家は大に抽象的の推理を試み、人を教ふといはんよりは人と其教義を研究するの態度を取るあり。

なほ又た彼等の文体に見るも、ヘブリューの方は簡單にして、グリーキの方は複雜なり、彼は繪畫的にして、此は科學的なり。凡べて上述の如き國語上の差異は、直ちに其の文學の性質を決定するもの

にして、ヘブリユー文學の寂漠たる、グリーキ文學の華麗なる、多く其因をこゝに發するものなりとす。

神話は人類第一の文學と稱せらる、今ま神話につきて兩國の差異を見るも、グリーキの方は客觀的にして自然其まゝなるに、ヘブリユーの方は主觀的にして人格により天然を解釋せるものなり、即ち一は無關心に見たる遊戯的のものなるに、他は目的々に觀じたる結局論的のものなり。而して神話は多く言語以前にあるものなりといへば、其の兩國語の發達の方向を決定したること亦た少小にあらざるべし。

なほ之を詩歌の上に就て見んか、ヘブリユーには只だ舒情詩あるのみ、之に反してグリーキには尙ほ叙事詩あり、劇あり、醫乎として其文壇の色澤をあげたり、而して特に注意すべきは舊約聖書がヘブリユー文學の粹にして能く其特色を發揮せりといふことなり、今ま試みに舊約全書を繙き見ば、其數百年に亘りて作られたるにも拘はらず、依然として其邦土文學の特色をあらためず、吾人讀者をして其異采を放てるに先づ一驚を喫せしめずんばあらざるなり、即ち人格と人格との關係、及び其の神との關係に於て、時に悲調を帶び、或は時に喜悅をなして、或は讃美し、或は呪詛せるものゝ如き、到底他國の文學にかくの如き强烈なる言ひ表はしありとは思はれざるものあり、之を除かばヘブリユー文學は直覺的記號的の簡單なる文字の連りに過ぎざらんのみ。

かくの如きは只だ文學上の相違のみ、思想の相違の一層深奥なるものに至ては、之を哲學、宗教について觀せざれば未だ以て知了し難きものあらんなり、いでや之より少しく其相違につきて見るところ

あらしめよ。

抑も哲學といひ宗教といふことの考を知るに最も善きは、其神といひ絶對といふものにつきての考を見るにあり。夫れセミチック人種は概して人間以上には、別に人格を有する存在ありて、こは道德的性質を有し居るものなりと爲すに反し、インドユーロピヤンにありては斯くの如きものを以て神とせず、天然的勢力、例へば火や水や山や川や、さては風や雨の如きもの〻中には夫れ〳〵神ありとなし前者が一神教か多神教かに陷るに對し、後者は自然崇拜の教にして凡神教的なり、こは其使用せる神といふ語の意義によりても明らかに知らるゝことにして、ヘブリューの神といふ語は大自在力の意にして、恐るべきもの、力あるもの〻義を含めるに、グリーキ、ロマ等の神の語義は「照」といふ意ありて、物質的の性あるが上に、前

者の大自在力あつて人間は全く之に從屬すとなすに反し、後者は神はさほど力あるものと思はず、多少制限あるものとなし、人間は或事に於ては神にも勝つことを得るものなりとの考を有せり。

かくの如くヘブリューの方にては絶對服從の思想あり、グリーキの方にては自由平等の思想に富めるの傾あるが故に、前者は政治に於ても自づから、帝王は神の支配の下にあるものにして、從て萬人の仰で必ず絶對の服從を爲さゞる可からざるものとなし、後者は神を恐るゝの情全く之なきにはあらざるも、一にも二にも頭を下げざる可からざるものとは思はざるが故に、彼の如くに專制政治を喜び、獨裁大權の君主を仰がんとは夢にも思はざることなり。

然かしグリーキなどにありても、只だ天然のものを人格化して、これにて安心立命は得られざりしものと見え、後漸く自然崇拜より遠

ざかり、之れより哲學的となり行けるなり、但し何程自然崇拜は之を脱却すといふも、到底ヘブリューの如くに唯一神の大能力を有せるものありとは考へ付かざりしところなりとす。而して思想の漸く進むに從ひ人生の最高善を求むといふことを稱するに至り、神なるものに對する考の大に面目を改めたるものありしと雖も、之かも之れ要するに人道主義にして、決して初めより神道を立して然るにはあらず、只だ人間なる者を次第に高く觀じ行きて、遂に天然の勢力にては説明し難くなり、かくて其服從を拂ふべき對象の漸く高く上ばり行きたるに過ぎざるなり。之を一言にせば、セミチックは初より神を最上のものとして立て、インドユーロピヤンは漸々に天然崇拜より人道教に移り行けるなり、即ち一は其性質の保守的なるが如く、其神も亦た不易にして其内容を更めざるに、一は其性の漸進的なるが如くに亦た其内容をも進めたるものと云ひて可なり。而して後者が斯く其崇拜の對象の内容を變じ行きたる所以のものは勿論思想進行の結果には相違なからんかなれど、其國遂に他國の併呑する所となり、波斯戰爭以後勃然として隆起せし當年の榮華も夢と化し、さながら英雄の老て漸く衰へたるが如きの境遇にありたるが爲に、時代精神の次第に寂靜主義に向へること、蓋し其因たらずんばあらざるなり。

かくて其神なるものゝ思想大に變じ來り、一歩一歩ヘブリューに近づかんとし、現世以外の安心立命を求めんとするに急なるの有樣なれば、多少時代精神を見るの明ある學者識人は一擧して此等兩國の思想を打して一丸となすを得べかりしなり、余つぬにパウロがダマスコの郭門に聖靈に打たれて耶蘇の徒となりたりとの一條を讀むこ

とに、彼れの卓拔なる學識のよく此精神上の調和に思ひ到り得たるを喜ばずんばあらざるなり、故に、バッロは先づ道をグリーキに傳へ、遂に其企圖空しからずして、ナザレの教へ、漸く天下に遍ねからんとするの勢を示せるなり、彼れ當年の得意亦想ふべきのみ。

以上、吾人はヘブリューとグリーキとの兩國民の性情を論ぜんが爲めに、遠く之をセミチックとインドユーロピヤンとの起原に見、其性情を究めたる後、多少つぶさに其學問技藝文學哲學宗教上の相違を觀じたり、是に於て吾人の特に感ずることは、人間てふ弱きものゝ其外圍によつて樣々に其氣質性情を變ずといふことなり、セミチックとインドユーロピヤンとが其性情を異にせる所以のもの一に其外界天然の然らしめたるが故なるは言ふまでもなく、ヘブリュー人とグリーキ人との根本的相違も亦た此因あるによらずんばあらざるが如し。夫れグリーキの中にありて、先づスパルタの地如何と見るに、こは即ちラコニア若くはラコニアと稱するところにして、ペロポンネサスの南方に位し、地味豐饒にして、スキリチス山脈は北に連り、タイゲトス山は南に聳へ、東と南とは共に海もて環らし、地勢の利、よく他國の侵擊に適し、加ふるにオイロタス河は溶々として邦の中央を貫て流れ、ラコニカ灣に注ぐの間、灌漑の便少なからず、其アケアン人を驅逐してドリアン一たびオイロタスの水に馬を洗ひし以來、其北方勇悍の性を遂うするを得て、一舉して覇を稱せんとするに至りしもの、一に其攻擊的なる地の利のよく然らしめたるところならずんばあらざるなり。次ぎにアゼンの地如何を見るに、アゼンは中央グリーキの南方にあり、緯度は三十六度の邊、最も人の生活に適し、交通に便にして、地味甚だしく豐かに、一時人

(ロ)ヘブリュー

口五拾萬と號しき、中に就て三分の二以上は奴隷なり、山水明媚、氣清朗、加ふるに外部の侵掠を防ぐに適し、天地獨り此の土に私し、四海の春を集め來りたるの感あり、正に至樂の仙境といふべし、宜なるかなッーキヂデスの言あるや、曰く「吾人は美を愛す、然かも華美淫靡に流れず、吾人は思辨推究す、然かも隱遁無爲の途に踏み入らず、吾人は大膽なり、然かも盲目的に企てず、吾人は能く快樂を與ふるものと困難なるものとを辨知す、然かも吾人は肯て危險を避くることを爲さず」と、

ヘブリューの地、然らば即ち如何、地勢につきていへば非常の低地なり、氣候につきていへば濕氣多くして而かも炎熱なり、耶蘇の生地ナザレの如き、多少風光ありと雖も未だ明媚なりとなさゞるなり。而して此族由來幾多の辛酸に遭ひ、此所彼所に流轉浪々の身となりし間に、其が接觸せりし天然を見るに、亦た皆な大陸性の氣候にして、イスラヘルの民は自からを天の撰民と爲し、其特寵を受けたるものとなすと雖、併て、五風十雨の溫和なる惠みに浴すること能はざりしものなり。

是に於てか翻て我が邦國民と天然との關係を見るに、何人も其のヘブリューに類せずしてグリーキに類しセミチックに似ずして而してインドユーロピヤンに似たるを思はずんばあらざるなり。然りと雖も是の如きは單に表面上の見解のみ、日本の有史以前に溯て、少しく日本人種の如何なることに由りて發生せるかを考ふれば、此事の更に深く歴史的の研究を要す可きを知るに至らんか。但し日本人てふものゝ何ものたるかに就きては、由來疑義多端にして容易に吾人の斷言を許さゞる所なりと雖、試みに吾人の信賴せる、人類學考

古學等の証明によれば、我が國民は、其習慣に於て、其遺物に於て、其言語及び其骨格に於て、正にセミチック人種なるフイニシヤ人が其の獨得の航海術を利用し、印度よりフイリッピン群島を經て、日本に渡り來れるを證し、其の印度よりフイリッピンに至るの海路は更にインドユーロピヤン人種たる印度人の襲ふ所となり、此群島に於て此等兩人種の文明の合して一となれるもの、數十分にして百里を走る黑潮の暖流に浮んで、「常世の敷波の」寄するまに〳〵大和島根に打ち寄せ來れるを示すものなり。是を以て之を觀れば、漫に表面上の類似によりて、日本の民族の性情を、グリーキに近くしてヘブリユーに遠く、セミチックと同じくしてインドユーロピヤンと異なれりと斷ずるは、餘りに輕舉に屬するやう思はるゝなり。抑も吾人のヘブリユーとグリーキと日本との間に於ける民族心理上の

類似を見出さんとする所以のものは、之によりて基督教の我國に於ける將來をトせんとするものなるが故に、吾人は輕しく其類似を求めて之によりて斷ずるの危險を冒さんとするものにあらざるなり、且つ夫れ表面上のみならずよしや事實に於て、上古の日本とグリーキとは全く其趣きを同じくせりといふも、これ未だ今日の日本國民の性情、否寧ろ今日まで養ひ來りつる日本國民の性情を知了せる所以にしもあらざるが故に、事いたづらに過去に屬するのみにして、進で將來を知るの助けとならざるは言ふまでもなきことなり、吾人は此一面より見るも、更らに今日に至るまでの歷史的考察を經て、以て我が國民性を審かにするの要あるを見る、

上古の日本につきては、吾人少しく前に之を陳べたり、而して今ま之を詳說せんは、重複の嫌あるが上に、餘りに歷史の學たるに偏す

るが故に、こゝには之を畧して直ちに記錄に上れる其の外國文化の影響の第一着なるものに就きて筆を起さん。

暫く東海の端に安けき夢を結びたる我が國民は、神后の三韓征伐によりて、亞細亞大陸の大勢に接觸し、端なくも其の文明の喚發する所となれり、支那文明の侵漸即ち之れなり、之によりて國民は先づ優美なる道念を得たり、即ち漸く倫理的統制の社會となり來れり、而して未だ物質的文明は起らざりしなり。然りと雖開化の波は四面より滔々として打ち寄せ來り、久しからずして單純素朴の生活を送りつる人民は、縞織を綾錦に代へ、土器を陶器に代へ、進歩せる醫術によりて病を治し、高尚なる樂器によりて歌うたひ、宏大なる建築を學びて樓閣を起すなど、民人の生活の程度著るしく進むに至り、遂に大和の朝廷をして戀と歌との巢窟たらしめ、外國の國先づ日本

の羈絆を脱し、國内と雖も邊陬の地は已でに叛離せんとしつゝあるに至りぬ、かくて天皇は臣下によりて立てられ、虚位を擁するに過ぎざりしに、大化の改新あつて以來帝室は再び重きを爲し、更に唐と海に戰て大敗するに及び、民人駭然として其胸中に國民的堺域を生じ、こゝに始めて國民的存在を確固たらしめたりしなり。

かくの如くにして一時三韓征服の餘威をうけて得々として安愉を貪り、殆んど醉生夢死の境遇にありて日夜快樂を追ふて水萍の如き生活をなせる國民は、幸にして今や其國民的存在を確かめ、國家主義の下に統一せられ、國を愛し、祖宗を尊ぶの念、勃如として奮ひ起れり、而して斯くの如きの時代精神は、極より極に至て復た極にかへるといふ歴史の法則に從て、見る〳〵保守主義の極端に進み行かんとせり。

而して此運命をして一層速かならしめたるは、天智天皇の急激なる進歩主義に對する反動ありて、天智の改革の急なりしと同じ度に於て然かく急激に起り來りたるものあればなりき、之を詳かにいへば、天智は元と華々しき英雄なりき、其勇武殆んど朝廷を空うしたるが如く、其威武を示すに過ぐること、其華美を好めること、亦た空前絶後なりき、其取るところの主義は、漸進的ならずして急進的に、平民的ならずして寧ろ貴族的なりき、故に實力あれども進取に急ならざる武骨の百姓どもは、此の貴族的壓力を以て迫り來れる文明の進歩と歩調を合はすること能はざりき、加ふるに唐と戰ふて敗れしことは、會ま國民的精神を奮起せしむるの因となるに及び、弘文の文藻風流なるに反して質實遠謀の大海人は、天位を避て山に入りたるのことにより、却て大に民の愛着を惹き、こゝに壬申の亂を起し

て保守黨は遂に急進黨に勝を制するの世となりたるなり。

然りと雖其結果は只だ中原の鹿を逐ふものゝ上に影響せるのみに止り、如何に保守の風は強く吹くとも社會の快樂生産、其他欲望智慧の如きは已でに改進の道をとり、亦た如何ともすべからざるの勢を呈せり、故に生産も日に進み、法制も月に進みて、改進の施設駸々乎として長足の進歩を爲し、民通貨の必要を感ずるに及びて鑄錢司をおき、婦人美を競ふに至て鉛粉を用ひ、服制を定め、戸籍を正し、徴兵の制を立つるなど、一旦は開化の急進に後れし百姓の、漸く文明といふ光りに照らされて其欲望の芽を萠やし初め、次第に之を逐ふて進むにつれ、國家は漸く制度を設くるの煩を增し、之れが爲に汲々乎として日も之れ足らざるが間に、藤原氏は着々其の專横の度を進めつゝありしなり、而して天皇は復た虛位を擁するものとなら

んとし、安閑として又いつしか宴會と行樂との朝廷を現出しぬ。

かくて社交の快味は極點まで求められ、風流韻事は絶頂に達し、深沈の男子輕んぜられて、花顔の美女漸く得意の時代となり、上下相競ふて奢侈を鬪はし、外觀隆々たるも內心衰凋するの世となり、上に僞善と婦女的謙遜との行はるゝあれば、下には阿諛者と見エ坊との信用さるゝ世となりて、國家おしなべて亦た元氣の見るべきものを存せず、故に一旦奢侈の必然の結果として社會窮困の有樣となるに至り、無敎育なるは火を放ち盜を敢てして有司も之を禁ずる能はず、敎育あるは偶まハイカラー的修練の爲め其生命を短うするに非れば則ち神經質となり、迷信家となり、御幣かつぎとなりたるなり、社會の亂離せざるもの此時只だ一絲のみ、

若し夫れ一個の剛骨男子あつて、四方不平の徒を召集せば、竹鎗席

旗彼れ手に唾して天下を覆へし得ん、かくて天武の保守的反動は只だ大波中の一小波瀾に過ぎずして、世は物質的文明に禍ひせられ、淫蕩遂におさむ可らざるの極、革命を山野の有髯兒に依賴するの已むなきに至れり、かくの如くして源平の戰は之れに次いで起れり、而して國史以來最も多く兵士の數を有する戰の行はれたるは實に此の時にありしなり、以て當時の民心を推すに難からず。

抑も武門武士なるものゝ天下をとり、其の政府を鎌倉に立て、宛然たる一個の朝廷を設けたる所以のものは、一は自から久しき間の蓄積に成れる實力（即ち壓制制度より獨立し、自由に家人たり地主たるの權を振ふを得るに至れる）により、公卿たちの如く社會的虛榮を求めざりしこと、二には他より尊族として敬まはれ、其英雄崇拜心によりて、領首として仰がれしこと、の二つの有力なる要素あ

りたればなり。

されば當代の精神は武斷的にして且つ民主的なりしなり、實力なくして虛位虛榮を貴ぶ貧乏公卿は社會思潮の外に放逐せられ、質實堅固にして保守的なる思想は世の一般に歡迎するところとなりたるなり。

然りと雖、頼朝の時、未だ全く武斷主義となり了りたるにあらず、情的なる南方人の將士等源氏を助けて頼朝の政を嘉みしたる間は、彼等の特質たる貴族主義は、未だ容易に「花より團子」的北人に習ふて名分を無視すること能はざりしが故に、なほ貴族の遺種を仰いで其首領としたりしより、かゝる間に頼朝（彼は一個の幸運兒のみ）の愚なる其婦女的猜忌心よりして自家の族を漸滅し、遂に北條氏の世となるに及び、こゝに純乎たる武斷主義は行はれ始めたり、武骨

一邊の精神は天下をとれり、功利主義の代表者は遂に快樂主義の代表者に勝てり、民心全く一變せり、而して政治は民人の利の爲に爲されて、宗祖、君臣、恩愛、名家、等の爲になさるゝことなきに至れり。社會は同類の共同利益と、其同族の長たるものを尊敬するの念との二つの爲に結合せられて、人間の社交性的趣味を滿足せんが爲にせらるゝことなきに至れり、即ち浮華なるは着實に、高尚なるは卑近に虛榮的なるは簡易直截に、難行的なるは易行的に、貴族的なるは平民的と變じたるもの、これ當時の思想なりしなり。鎌倉武士氣質なるもの、即ち是なり。

故に鎌倉の武士氣質は、少なくとも其初めに於ては、德川時代の武士氣質と異なり、北方猛獸の性を中心とせるもの、而して勝つといひ勇ありといふは彼等唯一の理想にして、負くること、卑怯なること

とは其の最も恥とせるところなりしを以て、強者に反抗すといふ如き一種の反抗心は其の特色なりしなり、

然りと雖も、元と頼朝の幕府を起すに至りしも、一は名族尊重の念ありて其因となれるものなるが故に、當時の武士道を活動せしめたる動機は、家名をけがさゞらんとするの念に出でたること無くんばあらず、但だ其所謂家名てふ觀念に未だ道義的要素を含ましむるに至らず、勇怯と利害との外には更に武士の念頭に浮ぶものなかりしなり、而して頼朝の如きも、武士たるものは勇あるを以て其眞面目とすべしとの觀念を有し、常に將士を勵ますに軍陣の功名を以てせしかば、當時の武士は只だ旨目的に勇ならんを欲し、「日本無双の勇士」といひ「無双の弓手」といひ、さては「坂東一のつはもの」といふが如き榮譽ある名は數萬町の領地にまさるの價値ありしなり。

此精神は善く其族長尊重の念と相容れ、武士は家名を重んずると共に、鎌倉的愛國心を振起するとなり、其の平民的、個人的、寧ろ利己的の精神も、漸く鎌倉の利害を中心とせる民族的統一を有し來り、加ふるに其の宗教は大抵は禪學にして、人生を觀じて石火電光の如きものとなし、文學亦た之れに影響せられて厭世の音を傳へしかば、彼等は漸く憐憫の情を萌やし、少しく涙あるの男子となり、其の壯勇的なる性質は、宗教文學の力に由りて輕快優雅の調を帶び來り、初めは勇怯を以て名譽と恥とを分つ標準となせるもの、次第に其猛性を和らげ、其好爭心を和げ、眞面目に、義俠的に、且つ優美的なる性格を作り出し、無學疎放の野漢も、今は君子らしく、貴族らしき一個の好紳士と化したるなり。

鎌倉の天下一百數十年、民は未曾有の治安を得、休養を得るに至り、

所在の豪傑餘裕を生じて心漸く驕るに及びたるも亦た宜なりといふべし。かくて彼等は惡事を働らきて私利を貪り、折角の鎌倉武士も、また元との默阿彌とならんとする頃、前後十四年の蒙古の戰により、勇武を西南の武夫と競ふて能く之を慴服せしむるに足らず、民心いよ〳〵北條氏を離れ、スワ鎗倉といふとも今は馳せ參せんものなきに至り、之れまで武家の掣肘を蒙りて非常の窮困に陷れる貴族等は、淫蕩の其心を蕩かすなく、偸安の其智を鈍ならしむるものなきが故に、次第に鎌倉武士の勢力を吸ひ取らんとしつゝありき、

加ふるに北條氏の末は高時の如き驕奢淫靡の徒によりて益々世の心に背き、朝廷の方にては絶世の智謀ある賢帝を出し、賢臣を生じ、治を求め、民に便していよ〳〵人心を引きたりしかば、英雄所在相應じて起ち、幾何もなくして君主親政の時とはなれり。

然りと雖も君主親政の世は誠に夢の間に過ぎざりき、そは諸英雄は悉く朝廷の考へ通りに貴族主義にして王政を喜ぶものゝみにあらざりければなり、即ち從來平等の功利を目的として行はれ來りし民主的政治の餘弊として、多くの英雄、特に北方の生民は、純然たる忠義の動機を有せんには餘りに利己的に過ぎたりしなり、これ時代精神なりしなり。

足利尊氏の如きは正に其權化といふ可し。彼れや到底王政の下にあつて榮ふ可からざるを知り、寧ろ多數の時代精神に從て之れにかなうやうなる幕府を樹てんとし、勤王の名を捨てゝ實權を收む可く中原の鹿を逐ひ始めたりしなり。而して彼れ好く之を成効せり、彼れは世に賊臣の巨魁を以て目せられ、惡逆無道の人物なりとせらる、之れ國史を楯として論ずるが故に然るなり、當時にあつては「天子

は木にて造るも、銅にて造るも只だ民の利を生ずるの道具たれば足れり」とせられたり、「己れ等の所領にして足らざる時は天子の料を奪ふも妨げなし」と思はれたり、當時の人民は僅かに所在に存せる忠臣の英雄を除いて、餘は悉く國の歴史を無視したりし人民なり、故に尊氏の如き人物は少くとも尚時代の精神より推せば正に日本の堯舜たり、君子人たるの資格ありしなり。北人固有の思想亦た驚くに堪へたりといふべし、嘗て頼朝は此の精神に乘じて鎌倉の天下を立てたり、而かも其量狹隘にして僅か八州の源氏を其藩屏としたるに過ぎず、尊氏に至ては膽略大にして胸量最も廣く、天下一切の豪傑を包容して廣大なる幕府を樹立せり。

而して一長一短は數の免がれざる所、頼朝は其局量小なるが爲に將士利を漁て相せめぐの隙を與へず、嚴然たる威望によりて其部下の心を收攬したるに、尊氏は之に許すこと餘りに寛大にして功利的武士は其自利心を滿足することに急に、而かも過大の勢力は與へられ居るとて互ひに跋扈し、爭鬪するの禍ひを釀し、室町の天下は其外觀の偉大に似ず頗る脆弱なる基礎の上に立たざるを得ざることゝなりたるなり。

かくて何時しか鎌倉武士の風流餘韻は亡せて、加ふるに頼朝の時と異なり、武權の勢力範圍擴大したるため、府を京都に置きたる結果、頼朝の盡力せし如き公卿風遠離の策は行はれ難く、剛骨の武士いつしか軟化して先づ女色によつて其武士道を腐敗し始めぬ、而して尊氏の寛大は、なほ其禍を來せるものあり、即ち一には足利氏の權執事に移り、功臣に移り、内部の動乱常にたえずして竟に其勢力を衰弊せしめたると、二には尾大渉く掉はずなり、實權は中心を離れて

天下の勢、遠心力を成し、地方の功伐甚だしくて豪傑は互に其隣國を侵略するの少なきを憂ひ、日夜刀劍を磨いて小族併呑のことに急に、遂に戰國の世となつて足利氏は煙の如く消え去るに至るの結果を生じたること、之れなり。

而して此の時に當てや朝權全く地に委して復た救ふ可からず、天下の勢は足利氏より、山名氏細川氏に相次いで移り、更に轉じて三好氏權を握り、松永氏之れに代り、次いで織田氏の興つて又之れに代はれる間に、鎌倉と京都とを中心とせる勢力範圍は漸く移て中央諸州に集まり、其竭盡されずして積集され來れる勢力を利用し、無數の英雄雲の如くに醱生し、これより我國の戰國時代に入りたるなり。

而して民力の休養によりて漸次潛勢力を積み來れるもの、中央諸州の外に別に南端の九州と山陽の南道とあり、これ皆な南北兩朝思潮の交戰、奔亂、靡弊の外に立て、徐ろに其の雄武と精鋭とを積み來りたるものなり。

今ま試みに元龜天正の間に崛起せる英雄兒の面々は、如何にして其勢力を作りたるかと考ふるに、彼等は多少名譽ある血統を有せざるにあらず、多少の學識なきにあらずと雖も、しかも畢竟「山出しの毛をとこ」のみ、彼等は裸体にて此大いなる天地の間になげ出され、只だ其の猛然たる勇氣と、死を恐れざる面魂と、寡欲廉潔にして士を愛する心情と、其いくさ上手の技倆とによりて成効したるものなり。

然らば則ちかくの如き資格あるものをして成効せしめたる社會の心意も亦た知るべきのみ、即ち當代の精神を尋ぬれば、鎌倉の天下興らんとする時代の如くに名族崇拜は其の心にあらず、同類の利も其

理想にあらず、或は足利時代の如くに自家の美田を得るを目的となすにもあらず、又たは奈良朝の虛榮なるハイカラ的なる社交的快樂を喜びしにもあらず、只だ優悠落々の豪懷を以て、其の横溢せる元氣を洩らさんと欲するのみ、何等の別に爲にするところあつて然るにあらざるなり、只だ女が男の己れを喜ぶが爲に容づくるが如く、彼等は己れを知りて己れを臣下とする勇將の爲に死せんと思ふのみ、別に永古よりの積恩あつて然るにあらざるなり、所謂る意氣の感激によるのみ、一將功成て萬骨枯るゝの活圖畫は、吾人之を我が元龜天正の間に見る。即ち當時は勇氣の豊年にして、當代の社會は武力の滿作を謳歌しつゝありしなり、快樂、利益、優美、さては血統、階級、人爵の如きもの、其理想としては餘りにプアーなりしなり。以て其の時代精神を知るに足らん。

即はち戰國的氣風なるもの是れなり。而かも此氣風たるや、鎌倉時代の武士氣質の如く盲目的に勇怯を爭ふて殘忍を敢てするが如きものにあらず、仇敵と雖も强者は强者として贊嘆し、其窮を見ては戰袈上の利害如何に拘はらず之を救はんとしたるなり、例へば謙信の信玄に於けるが如きこれなり。其心事の落々たること光風霽月もたゞならず、利害較計の外に超越して、勇猛の士なほ人情の微を解し、「忠勇義烈」は正に其理想的文字なりしなり。後代任俠の風已に此時に胚胎すといふべし、たゞ未だ此時までは「義理」てふ觀念の社會的統制となりたるを見ざるのみ、そは戰士は所謂「山男」にして本來學者にあらざればなり。而して只だ人情のみ其道德たりしなり、人情といふも一般に義理人情といふ如き、性得的の意味のものにあらざるなり、これ單に弱者に對する憐憫の情をいふのみ。

故に戰鬪的氣風は沈鬱悲愴の調を帶び、華麗雄大の趣きに缺けたり、上古の日本に於ける氣風の之れに反するは、其勇猛の氣に混せる人情なるものが、極めて小供らしく、極めて素朴にして、從て直情徑行に近く、本能の滿足を許るし、美的無關心的なりしが故に然るなり、かくて元龜天正の間の武士氣質は幾分厭世的となれり、而して其厭世的なる所以のもの、鎌倉武士氣質の佛敎に影響せられて遂に厭世的となれると全く其趣きを異にし、當時の宗敎は眞宗法華宗の如きものにして、別に當時の氣風に影響するほどの力あるものにあらず、只だ其氣質其れ自身の人情的なるところよりして生じ來れるものに外ならずと知るべし。元龜天正の間に於ける我が時代精神なるもの正にかくの如くなりしなり。

而して幾多の英雄星の如くに散在し、絕世の豪傑豐臣秀吉遂に之を

統ぶるに及び、一小島にありあまれる英雄力を擴げて三韓支那に遠征を試み、神后以來の一大雄圖を企てたるに、事志の如く成らずして軍を引て歸れるは、蓋しこれ天下の人心漸く禍亂に飽き且つは軍費にたへざるの致すところなりしならんも、一は秀吉一身の事情亦た其因たらずんばあらざりしなり。

そは兎も角も、世は漸く英雄時代に飽き、產を治めて泰平を樂まんとするの意ありしことは事實なり、かくて世は德川の統一によりて復たこゝに大なる幕府を戴くことゝなり、時代精神の變移を生じ來れるものあり。

今先づ吾人をして當時の武士の階級に於ける氣風の如何を窺はしめよ、彼等は武勇を重んじ武器を尊び、兵馬の術を練習するに勉めたり、而して安逸徒食は士の爲すべからざる所なりとせられ、身に襤

樓をまとふとも腰には數千金を價する貴重の寶刀を横たへ、學殖の以て多とすべきなきも、武術を練り志氣を奮はすの上に於て補ひとなるだけは充分に之を修めんとしたり、又た彼等は忠孝を重しとし、就中主に忠なることは最も勝れたる德なりとせられたり、故に君の爲に其仇を報い、父の爲に宿怨を晴らすが如きは、此の時代の如く多く行はれたるを見ざる程なり、而して又た彼等は元龜天正の英雄と異なり、多少修養せる所あるが爲に、徒らなる精力表出を以て、理想とせず、其勇武は化して新なるものとなり、其膽氣は節約謹愼の分子を容れ、其意氣感激の精神は旨目的ならずして義理の念により て成立し、其の放逸不羈に流れし酒々落々の心事は、更らに道德的根柢を得、其生活の質素なるが爲に金錢を貴ばざりしもの、今は又道德的分子の入り來るありて、清廉なるが爲に然るが如き樣となり、法なく戒なくして憐憫の情の動くまに〳〵行動するを美事なりとせしもの、今まは禮節作法に悖らば內心の美も美とせられざるに至り、忠義てふ意義も一變して社會的制裁を伴ひたる忠義となり、道德的制裁即ち義理あるが爲めにするの忠義となり、祖先より代々受け來れる恩に酬ゐんとし、己のが功績を以て子孫を敎へんと意識して行ふの忠義となれり、忠義以外の諸德に至てもまた然かり、即ち彼等の父祖は英雄時代にあつて自家一身の勢力の快感の爲めに、信を守り、然諾を重んじ、体面を重んじ、無辜を助けたりしもの、今は孔孟の敎に照らされて自家の品格を高めんが爲にし、道德法に適へるが爲にし、理に於て然るが故に然りとし、社會萬人の習慣法なる故に之に從ふといふが如きことゝなり、自律以外に少しく他律的分子を入れ、主觀的なりし道德の標準も客觀的のものとなり來れるもの、

これ彼等の倫理主義の變移にして、兼て其の氣風一般の變化を致せるの因たりしなり。

然り而して次に吾人をして武士以下百姓の氣風につきて一考せしめよ、思ふに天下動亂の極、東に行くも西に移るも刀劍の鳴り響く音の聞こえぬ地はなく、出ては野に耕して安んぜず、入ては寐ねて蹄の音に驚かさるゝもの、これ當時彼等の憐むべき境遇なりしならんか、されば一旦天下の形勢定まりて、今は安んじて生産に從事するを得といふに至り、百姓の德川幕府を仰いで其の守成的なる態度を喜び、永へに之を謳歌せんとしたるもの、また當然のことゝいふべし。

然りと雖も、若し武士の子にして天性英雄の資を具ふるものゝ如きに至ては、祖父の翁、其の白髮の眉を逆立てゝ、過ぎし昔しの壯氣を物語るを聞く度に、轉た昔時の壯快なる天地の偲ばれて、折りもあらばと思ひつゝ幾度か手もち無沙汰のかいなを擦りたりしならん、然かも社會の勢は彼等の志望と反對の方向に進みつゝありしなり、即はち金てふ社會的統制は一歩々々嚴乎となり、人心漸くまた偸安をこれ希ふに至り、革命の兒は出でゝ策の施す所なきにもだへ、入つて松菊を友とするの風流を知らず、遂に餘儀なくせられてフラフラと家郷を出で、虎を得ずば鼠を捻つて其變を喜ぶの氣を漏らさんとするもの幾千人、所在に武者修行と稱して天下を横行し、父祖より聞き得し戰國的智識を用ゐて諸侯に說くものあれば、武藝を戰はして勝ち指南の看板を下させて以て其猛性を滿足せしめんとするものあり。

而して此時に當てや、世は滔々として太平を歌て皷腹するの有樣な

りければ。柔腸弱懐の諸侯は此等の浪人を恐れて案外に善く待遇し、偶ま氣慨あるの諸侯あれば、窃かに野心を懐いて浪人を養ふの禁令を犯かすといふが如く、浪人等の好遇せらるゝ世にてあれば、彼等いよ〳〵氣を負ひて、諸侯何をか能くせんとなし、天下を睥睨して無祿却て誇るに足ると信じ、或は思ひ切つての謀反企てゝ破るゝものあり、或は一生遊俠を以て終るものあり、何れにしても其が百姓を教化し、祿に坐せる德川の武士を刺激せるもの少小にあらず、後ち國家安康の氣に釀されて、人心弛び、士氣廢するに至りたる時、任俠の風は世の慕ふところとなり、或は平民より起り或は武士より下つて故らに俠客の群に入るもの漸く多く、醉生夢死を事とせる平凡なる社會の水平面上に幾多の小說的波瀾を起し、戰國以來遺傳し來れる倜儻の氣、なほ我が島内に絶えざるを証せり。

然るに此等の氣風を代表せる江戸兒や俠兒の如きものも、亦た其反對の氣風を爲せる一般社會と同じく、覇氣を尊びて守成の德を賤み滔々として榮華を逐ふて以て其の驕慢の性を滿足せしめんとしたるは一なり。かくて富に驕り賤を輕んずるの風は到る所に行はれ、天下漸く復た財の欠乏を生じ、流石のイキ肌も次第に根性きたなくなり、旗下のみにても士の窮困甚だしきもの凡そ八千人の多きに達し、諸侯の邑亦た之に准じ、怜悧なるは殖產に汲々とし、愚鈍なるは日を追ふて墮落せんとするの有樣となり。赤穗四十七士の美擧の如きも、社會に覇氣相凌ぐの氣風あるが爲めに僅かに昔時の戰話を聯想せしめ、只だ詩歌的に社會の崇敬を惹きしに止まりしなり。かくて元祿武士の氣質は奢侈と結びつきて先づ經濟の上より倒れ、町奴より一般百姓に至るまで深嚴朴實の性を缺き滔々として輕薄を

逐ひ、戰場の子いまは芝居役者の如くなりしもの、これ德川氏中世の一般氣風なりしなり。

之れよりして其末世に入るに及んでや、たとへ吉宗の如き明將あり君美の如き賢臣ありたりと雖も、主側つねに佞姦の士に充たされ、古風を興さんとするの改革も其反對の勢力强きが爲に行はれず、金錢は以て節操武勇の德を買ふ可く、肉慾は以て北人の嚴肅なる氣風を蕩かすに足るものあつて、武愚は日に文弱と化し、紳士の風は日に商賈の風となりつゝありしなり、かくて市府はいよ〳〵榮へて封建の世を謳歌し、さきに群雄の交爭によりて傷められし百姓は今や其土に安んじて其傷を癒やし、其自立を致し、生々繁殖するに及んで、武士の頑固なる頭も其倉庫の前に下さしめ、昔時の武門が公卿に對すると同じ比例にて之に對し、其空名を侮つて己れの實力を恃

む程となり、さきに武力即實力にして道德これ最高目的なりしもの、今は金錢即ち實力にして經濟これ最高目的なるが如き世の中とはなりつるなり、換言せば武の時代は已に去て正に富の時代は來れるなり。これ邦人の向上的精神の墮落にして、現世的精神の勃興すべきの時期なり。

かくの如き天下の勢力として、而かも又た特に當時の如き社會制度の結果として、財政の困難は甚だしく幕府をなやまし、其極や國民の救ひたるべき幕府の、却て其の厄介となるに至らんこと初めよりして明らかなり、加之、幕府其れ自身の中にても、譜代は智と勇とに於て外樣に如かず、大身は亦た實力に於て元氣に於て小身に如かず、特に外には西歐文明の潮の如く寄せ來らんとし、開國せよといひ、交を結ばんとせるの際、國家てふ理想の漸く發現するものあつ

て、內外力を合せて幕府中心力の瓦解に乘せんとせしかば、幕府遂に自棄して天下の權は再び朝廷に歸し、時代精神は俄然として動搖を生じたりき、而して動搖の最も甚だしかりしは國家統一的大思想によりて引かれたる國民的自覺、革新的元氣、これなり。

抑も是より以前の尊王主義は、一種の詩歌的懷古の情たるに過ぎずして、其主張する所を問へば、要するに天皇の采邑を多くすべし、皇威赫々の舊時に復して幕府は宜しく皇室を敬すべしといふに止まり、未だ政治的の意義によれる尊王といふことは世の慷慨家も認むる能はざりし所なりき、然るに如今天運會ま來り、擧國擾々、民は巢を失ひたる蟻の如くなるに、幾多の英雄目的を一にして國事に盡したる結果として、鎌倉幕府以來未だ一たびも政治上天下の上に立て赫々の光を垂るゝ能はざりし朝廷は、今ま忽焉として五里霧中の混沌を排して出で、恰かも早天の旭光の如くに全國民の眼前に照臨したるもの、之れ維新の大業なりしなり。

國家的統一の精神はかくの如くにして勃然隆興したりきと雖も、然れども滯ふ思想は未だ全く芟除せられたりといふ可きにあらず、蓋し幾百年間或は英雄の割據に任かせ、或は封建制度の壓迫をほしいまゝならしめたるの結果、國民の社會的意識と平等思想との發達を妨げたるもの、其の拔く可からざるの因を爲したりと言ふ可きのみ。而して維新後に於て再たび幕府勢力の恢復を見、更らに薩長土肥の間に敵視せることありしに見ても、吾人は藩的思想の如何に牢乎として國民の胸中より拔く能はざりしかを知るに難からざるなり、況んや今日に至るまで、政治の上に藩閥的爭鬪の行はるゝことやまず、曰はく學閥曰はく何閥と呼號して徒らに蝸牛角上の爭ひを事と

するを見ば、何人と雖も蓋し思ひ半ばに過ぐるものあらん。

是より先き幕府を敎へて開港に關する事件を調理せしめ、先進が後進を待つの態度を以て親切に公平に吾を誘ふて國を開き外に結ばしめんと勉めたるもの、米國其一に居り、英國は其の次ぎにあり、されば當時の思想は此の兩國の思想に接近し來り、所謂歐化主義なるもの發生し始めて、其の唯物主義は端なくも腐敗せざる武士氣質、江戸ッ兒肌、町奴氣風などいふが如きものを根柢より破壞せんとし、此等の氣風が德川の末世に當つて僅かに一部氣節あるもの丶間に存留し、日に繁榮に進める市府の黃金主義に蝕食せられつ丶ありしに乘じて、社會淘汰の酷法は社會の思潮を逆まに走れる孤立不遇の悲歌の士をして、正に寒呂に泣かしめたりしなり。

かくて世は滔々として泰西の文明を謳歌し、自由、民權を喋々し、

維新當初の尊王的精神は何時しか其跡を絕たんとするの勢ひとなりたれば、少しく東洋的愛國の情あるものは、廟堂の士の進步主義自由主義及び共和主義を吐くを見て、其の激烈大膽なるに驚き、其なす所は虛僞、其志す所は尊氏の如きものならずやと疑ふ際、佛國風の政論をとつて人權問題より國家の根本的革命を目的とすべしと結論せる自由黨の徒と、英國風の實利論によつて刻下の問題を以て政論を定め著々步武を進めんとする改進黨との兩派の爭端いよ〳〵熟し、敵視は互ひに其覺悟をして固からしめ、爭鬪は其の運動をして益々甚だしからしめたれば、自由黨の徒最早や言論を以て爭ふは無益なりとし、人心の動搖に乘じ一擧して理想の革命を起すべしとなすに至りたれば、所謂愛國の士たるもの正に此時を以て天下兩分の日となし、自由民權の首魁板垣の要擊は遂に保守的暗潮流の澎沱た

るを証するに至りぬ。

而して此の一大暗潮流は、獨り一派の自由黨に抗したるのみならず、改進黨の派と雖も亦た其狙擊を被らんとするの恐れなきを得ざりしなり、これ此の兩黨其の稱するところは各々相異あり、其の取る所の方針も亦た別途に出づるものありと雖も、然かも畢竟するに其頭腦、其心情、等しく藩閥の壓抑を離脱し、其の爭亂を制止し、而して民主政治の理想を實現せんとせるものなりしを以てなり。

かくの如くして保守的反動は大河の決するが如き勢を以て進み來れり、此時に當つて、兩虎の相搏つが間に翩々として幸運に乘じ、保守的の時代精神に擁立せられんものは果して如何なる人たるならんか、思ふに其人、保守的且つ貴族的にして而かも冷血なれば以て足りなん、必ずしも一定の政見あるを要せず、又必ずしも鉄血敏腕あ

るを要せず、只だ利と不利との勢を觀取するの眼あり、之を觀取して八方圓滑に切りまわす才あれば則ち足る、而して天下廣しと雖も伊藤博文一人こそ實に其人なりしなれ。

彼れ獨逸に入てビスマークの鐵血政策を傳授せられ嘗て民權の思想澎湃せるによつてアワヤ政治の圈外に忘れられんとせる宮廷をして、再び之れと密接の關係を有せしめ、獨逸の貴族主義を借り來て、上に己れの兇るべき所を設け、後進の士を網羅せんとの策を立て、大學を始め新進の出づ可き門戸ごとに己れの部下を置て網せしめ、以て下に己れの坐所を設けんとせり、而して彼れが爲には幸にも民間黨の末運惡しくなり、或は相乱れて散じ、或は内訌によつて振はざるに至り、彼の行く可き道は坦々として更らに目を遮るものなく、貴族は羽ぶりよくなると共に彼を助くること益々盡し、加ふるに其

獨逸よりの歸朝と共に扶植せる獨逸學は次第に學問界に入り、漸次に思潮を飜へし、國家主義は歐化主義に代つて忠君愛國の語もて擁護せられ、更らに其特得の圓轉滑脫なる政略は、よく政黨の爭亂に飽けるものを籠絡し得て、いやが上に其勢力を增加するに至り、彼れが始めたる超然內閣は期せずして泰山の安きを爲し、更らに井上馨の如き貴族的にして然かも急進的なる歐洲主義を有するものをして己れを補けしめたるが故に、一方に於ては懷古守舊の情によつて貴族を釣り、之れと共に民間の異論を滿足せしめたると同時に、他方に於ては此等の貴族を誘つてピヤノの音樂に妙齡の少女と舞踏せしめて、古風の歌垣よりも快興多きを思はしめ、次第に之れを歐化して民間の急進的なる歐化主義と衝突せざらしめ、其間に自家の懸れる網を張て固からしめ、之れと共に保守家の必然的に有す可き貴

族主義的傾向を滿足せしめて苟て保守派の反抗するを許さゞりしかば、彼れは國史あつて以來初めて卑賤を以て大宰相たるの人となり、而かも些の怨恨を他人に懷かしめざるを得たりき、これ世に八方美人の稱ある所以なり。

かくの如くにして彼は上と下とに其一身を安んじて懸るべき網と、足臺とを設けたれば、假令へ如何樣の政變あらんとも、少しも恐るるに足らず、後ち政府部內の不折合、民間政黨の動搖により、或は種々の因由により、幾多の政治的混亂起りたるの日にありても、彼は春風に帆をあげて洋々として常に其の快を失はず、才子佳人を携へて洋風的淫蕩一世を壓し、輕妙巧快の長州的交際手段をふるつて世とよく推移し、たとへ倒るゝも必ず何物かをつかんで立つの智あるが故に、一代の羨望一身にあつまり、偶ま彼れに快からざるの徒

ありとするもなほ且つ時世の寵兒たるを失はざりしなり、亦た幸運の人といふべし。

これ彼れが性格たまゝ時勢と合一せるものありしが故ならずんばあらざるなり、即はち彼れは保守的反動の波に浮み上げられつ、歐洲帝國主義の流れ來て吾が時代精神となれるに乘じ、其の生れながら有せる南人的の貴族主義を標榜して、更らに自家獨得の公卿的快樂主義に得手の帆をかけ、以て世間の唯物主義より主樂主義に移らんとする思潮に從て搖々として進むを得たるもの、之れ彼れが成効の因由たりしに似たり、然らば則ち伊藤をして匹夫國史以來初めての立身を爲さしめたる時代の精神は、亦た伊藤其人の性格其まゝなりしといふも不可なからん。

然と雖も現在の時代精神に至つては、吾人少しく又た其間に區別を

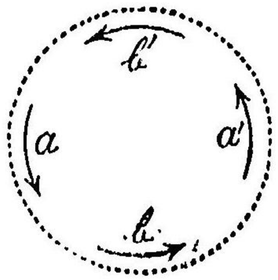
措かざる可からざるを知る、乞ふ試みに之をいはん、

先づ外圍的事情よりいへば、日清戰爭と其結果たる經濟界の動搖とは、確かに外部より今日の國民的意識を動かしたるものにして、次ぎに內的因由の重もなるものとして學說上倫理主義の變動即ち之れならん。

吾人はさきに神后の時、我が國の初めて亞細亞大陸の運命に接し、之れに煥發せられて、國民は何より先きに優美なる道念を得て、朴素の生活は倫理的統制によりて支配せらるゝに至り、次いで物質的文化を得、國民の生活程度進むに及んで法律制度の繁多なるものを要するに至りたるを見たり、而して今ま之れを明治の世につきて見るに、順序は全く之れと反對にして、國民は初めて歐羅巴大陸及泰西諸島の文化を受けて、先づ其の制度法規を摸倣し、次ぎに其の物

質的文明に煥發せられ、最後に其の思想との敎義を受けたるなり、無論基督敎は已でに開國以前に輸入せられたりしと雖も、其國民的意識に上つて遍く之れに感染したるものとしては蓋し最後に位せざるを得ざるべし。而して三韓征伐以後に隆々として進歩せる物質的文明が國民的元氣を沮喪せしめ、一世を擧げてハイカラ的修練に狂せしめたるの結果、大化の改新天外より落ち來て再び國民の活氣を奮ひ起こし、次いで唐と海に戰ふて大敗するに及び國民的自覺を生じ、以て國民的存在を確固ならしめたるもの、亦た明治の世と其の順序を異にし、今日の國民的存在を確固ならしめたる所以のものは彼れ歐米の開國をせまりたるに因するが故に最も初めに位すべく、政治的大改新は之れに次ぎ、國民意識の腐敗は最後に來りたるもの の如し、而して順序のかくの如く逆となれる所以のもの、之れ畢竟

歴史は環の端なきが如くに廻り行くを証するものにして、左圖の如くにaとá とは其の矢の向ふ所を異にし↑↓の如くに相反せるの觀あり、b′とbとも亦た然かる所以のものは、abá b′相めぐつて環をなすに由ると一般なり。



然らば則ち余がさきに言へる外圍的事情より せる國民意識の變動は容易に其理由を知り得可けんなり。

夫れ日清戰爭一たび起るや、政黨の反目嫉視は墻外の敵の爲めに中に一致し、秀吉の征韓遂げざりしを無念に思へる國民的膨脹心は其の固有の敵愾心をして一層燃火を强からしめ、日ならずして支那の國都將に落ちんとすと聞えたるに、三國の同盟なるもの現出して我が併呑を妨げたれば、日本は外交に於て拙なりとの嘆聲到るところ

に聞かれ、就中軍人連の憤慨は特に甚だしきものあり、或は空しく長劍を撫して切齒し、或は激昂の餘自殺を遂げたるもありし程にて、恰かも天智の世に唐と軍を交へて失敗したる結果、國民的自覺心を强からしめたると同じく、當時の外交的失策の結果と見なされたる如上の蹉跌は、さなきだに敵愾心と結合して生せる國民的自覺をして一層其力度を强からしめたり、

かくて民心は從來歐風の新快樂により、又た其の物質的文化により て、あはや偸安に流れ淫蕩を逐はんとせる際、此の新たなる一種の洗禮を受けて其の墮落を免がれ、有爲の氣運國の全部を蔽ひ、新事業の企圖、新計畫の勃興、恰かも春雨を得て筍子の生へ出るが如く彼所にも此所にも現はれ出で、男も女も戰爭に警戒されて喚起した る其の横溢せる元氣を以て活動を始め、二億万兩の償金は更らに脈々たる活動の元氣をして一層盛んならしめたり。

之れ實に一見案外の好結果なりき、然りと雖其眼の士夙とに此の好景氣の惡結果遠からずして來らんを豫想せり、之に次で起れる金融の逼迫即ち之れなり、蓋し國民一時に膨脹し、生活の程度一躍して進み、加ふるに濫費も亦た頗る甚だしく、直接快樂の爲めに供せられたる營業を爲せるもの、今日一擲千金の當年を顧みて嘆ずるほどなりしが故ならんか。

然りと雖も結果は獨り之に留まらずして、なほ一層惡しきものを生じたり、生活の困難、世間の不景氣よりなほ惡しきものを生じたり、何ぞや、曰く時代精神の萎靡之れなり、

抑も社會意識は個人意識の集合其ものにあらず、而して前者の道念は極めて幼稚にして、未だ個人意識が道念によつて統一さるゝ如き

ものあるを見ず、故に社會意識にありては、管氏謂ふ所の衣食足て禮節を知るてふ倫理的法則は寸毫も違ふことなく正に之に適合すべきものなりとなす、故に日清戰爭以後金融の逼迫は、引いて金錢崇拜となり、唯物主義の極端となり、高尚にして趣味あるものは擯けられて冷血溥情十呂盤づくの素町人は重んぜられ、遼東の野に戰て征清の際世の尊敬を受けたる軍人等は、今は恩給に飽食暖衣して時代精神の如何を顧みず、其のサーベルと勳章とは案外にも彼等の倨りとらなずして恩給賞與金こそ却て其の名譽となり、維新以後國事多端の際に官衙に徹夜して世の尊敬をうけたる文官等は、侮蔑の意味ある「御役人樣」を以て馬鹿にせられ、一層下れば「腰辨當」てふ巧妙なる綽名を付せられて三助だもなほ之を目笑し、車夫、馬丁、幇間、藝妓の類、概ね判任以上の生活を爲すの力を有し居るが故に、官吏等の增給を乞はざる可からざる苦境を見て以て却て之をあなどり、婚嫁の如きも多く財産の多寡によつて定まり、雇傭のことは無論、親切も情けも全べて金錢の多寡によりて買はれざるものなく、現世のこと一に金次第となり、執鞭の士と雖も財多ければ世の信を得可く、清廉の士と雖も財乏しければ民の理想とならず、名譽も屢々財の爲めに犧牲とせられ、色を賣るの淫賣婦、官をひさぐの收賄者、情誼を賣る恐喝取財の徒など、滔々として風を爲し、社會の暗黑面は次第に擴がり行きて、此の世は富豪の天下たるを証明しぬ、而して此の如きの主義は偶まハイカラー的修飾の氣風と相容れ、家にあつては豆腐の粕を食ふとも外に出でゝは西洋料理を食はざれば人の手前が立たず、妻子は餓に泣くとも待合遊びをなさゞれば紳士の体面に客嗇のきづがつき、無きものも有るが如く、貧なるも富め

るが如く、多忙なるも餘裕あるが如くに見せかけざれば、人の信用なきに至り、破産は唯一の重刑にして投機の千金は唯一の名譽となり、無智にして沒理想の劣等男兒、禁錮幾年監視幾月といふ下等動物も偶然機に投ずれば才子佳人之れに侍べりて一に其意を仰ぎ、人道の念强くして俯して士を救はんとする人も、一旦其正直を利用せられて投機屋の爲に產を破らば門前は寂として雀羅を張るの有樣なれば、勉めて苦しき樣を外にあらはさず、强いて紳士のよそほひを爲さゞれば、羊頭と雖も狗肉としてだに賣ることを得ず、僞善は滔々として一代の風をなすに至れり、時に俗謠あり、曰く「シャッポかぶりて洋服つけて、人が居なけりや手鼻ふく」と蓋しシャッポといひ洋服といふは、以て其の紳士たるをあらはし、手鼻云々は其實際價値を暴露せる所以なり、之を以て紳士は僞善者の套語なるを言ひあらはす、亦た穿ち得て妙といふべし。

然り而して紳士が社會の模型にして、其の時代精神の權化なりしが如く、三十有餘年の今日の夫れは「ハイカラー」てふ人格即ち之れなり、ハイカラーとは其譯「高襟」にして、元と歐洲文明の扶殖に力むるもの丶代名詞なるが故に、元來は善き意味を有したる語なれども、國音たま〳〵「灰殼」に通じ、「吹けは飛ぶやうな」意味あるゆへ、遂に之を以て輕薄才子の代表語とするに至りたるなり、いま其の內容を問へば、曰く、第一拜金主義なること、次ぎに、歐米通なること、從て世界的の主義抱負を有し、島國的根性を脫離せること、身なりを修めて社交にたけ、御世辭をよくして頑固ならず、內心夜叉なるも外面は菩薩を裝ひ、髮をそり、流行の洋服を着けて香水を用ひ、以て其の貧乏臭きを蔽はんとすること之れ

のみ、修養の如何、問ふところにあらず、只だ英語なり何なり少しく嚙り居れば足る、道念の如き、品格の如き、なほ更ら問ふの要あるなし、遂に綿羊の如くに內を僞れば足るとなすのみ、然りと雖も、ハイカラーたらんものゝ資格には、なほ一の重要なる條件あるを要す、其主義の快樂主義なること之れなり、故にハイカラーと紳士との區別は、一は快樂主義にして、一は利己主義なるにあり、之れハイカラーは紳士の少しく歐學を修めたるものにして、やゝ唯我的なることの惡しきを知り、且つは社交的修練の結果として、たとへ實際は利己主義なりとも、強いて之を蔽ふて綽々として樂めるの狀を示さんとし、遂に快樂主義に入るものなるが故なり、是を以てハイカラーは僞善の更らに一歩を進めたるものといふべく、又た僞善紳士の出世せるものといふて可ならんか。

然るに時代の代表的役者が紳士より移てハイカラーとなれる理由に至つては、なほ別に考案を要するものあり、こは軌近の時代を作成せる第二の因由即ち學說上よりせる國民倫理主義の變遷に見ば明らかならん、

今より吾人をして此の方面の變遷を考案せしめよ。夫れ維新以前の學說は勿論多樣多種にして一概に之を論ずること能はずといへども、要するに其の東洋的學問の一般傾向として學問は學其れ自身の爲めに研究せられず、別に爲にするところあつて討究せられたるに於ては等しく一なるが如し、即ち之れを詳言せば、元來これまでの我國に於ける學問は、畢竟支那學の摸寫たるに過ぎずして、而して支那人の思想たるや極めて實行的なるが上に、最も多く我國を感化せる儒教の如きは怪力鬼神を語らず務めて實際風教の上に好果あらしめ

んを期するものなるが故に、日本に於ける教育の歴史に見るも、教說は即ち一家言にして、眞理は多數の共有たらず、教說は常に教權を伴ひ來て、嚴として犯す可からざるものあり、故に弟子の其師を見ること使徒の教主を見るが如くにして、師は活佛、弟子は信者なるが如きの觀あり、但だし間々出藍の才あり、若くは反抗的勢力を有し、若くは反動的氣質あるものに至つては、事例は即ち之に反すといへども、然かも一般の傾向に至つては、なほ如上の弊風ありしなり。かくて智識は智識の爲に探求せらず、眞理は眞理の爲めに學修せられずして、必ず何處かに實際的目的を有し居たるものなるが故に、別に歐洲中世紀の如く宗教の爲に眞理探求に束縛をうくることはあらざりしと雖も、而かも惰勢は遂に東洋的學風なるものを生じ、學は必ず一方に於ては術にして、訓詁の學の如き一見純然たる說明的のものも、なほ一家の學風として立つ以上は必ず之れに閥的分子を加はへ、多少宗教的分子を加味せざるものあらざるなり、故に若し近來の造語を以て之を言ひあらはさば、維新以前の學は畢竟皆な職業的の風ありて、洋學の遊戯的なると正反對なりしといふて可ならん、而して其の、一は教權的にして他は自由的なる所以のものは、全く彼我の邦土に於ける民人の氣風の差より生じたることにして、彼れの個人主義的となれる、我れの家族主義的に傾けるが如き、亦た之れに因せずんばあらざるなり。

然り而して彼の土に生じたるものは此の土に入ては必ず何等かの影響を及ぼさずんば已まざらんとするが如く、彼れに生じたる學風の維新と共に我が國に入り、滿帆の洋風に乘じて蕩々として學者を風靡し來れるに及び、教權的分子は隈なく拂ひ去られんとして、自由

討究は盛んに起り來り、間々慨概保守の徒をして其の奇異の論結に驚かしめ、其の極端の推論に激せしめたることあり。

而して從來一小島内に蝸牛角上の爭ひをなし、若くは時に世界の廣大なるを知らずして地球上の風波を餘所に、高枕安臥して小さき心胸を喜ばしめたる結果、民衆一般に神經質となり、感じ易き氣性となり、迷信を懷き、禁厭を行ひ、稍や厭世の調を帶び來りたるもの、一旦洋學の自由討究により、牽牛織女相會すとなしたる詩歌的の蒼天は單に物理學的對象に過ぎず、水神あり海神ありと信ぜられたる宗教的の河海はまた一個の物質にして更らに恐るゝに足らざるを知り、大魚あつて動かすものと思はれたる地震の如きも本とを探ぐれば更に何の不思議もなく、雨あられ、雪や氷とへだつれども、小首をひねつて考ふれば又た更らに神の力あるにあらず、詩歌的妙味あるにもあらず、只だ旨目的なるエヂルギーの其態を變ぜるに過ざざるを悟り、梅櫻ぼたん芍藥と其美を賞すれども、手に取て之を分解せば其美は即ち生殖作用の方便たるに過ざざるを知り、動物學を研め生物學を學びて愈々人生のさまで尊ぶに足らざるを解し、人類學を學んで帝室の有り難みを減じ、生理學を解して人心の靈妙を疑ふに至り、萬國の歴史は更らに其眼光を廣め、世界の地理は彌が上に其の心胸を開き、民俗は教育の布及せらるゝに從て宇宙に何等の驚異す可きものなきを知り、旨目的なるエヂルギーとマターとの外、此世此人生は更に何物にてもあらざる事を敎へられ、靈妙と美と崇嚴とは、一種の迷ひに過ぎずといふ福音を得たるが上に、彼等は世界的眼光を與へられて、今は一切の迷信を棄て、禁厭をやめ、舊慣を忘れ、而して厭世の跡を絶ちたると共に、飜つて自家の精神に顧

み、人生の單に機械的ならざるに氣付き、更らに顧慮して以て懷疑に入るべく進行しつゝありしなり。

かくの如きもの凡そ明治二十年以前のことに屬す、以後十年は即ち殆んど懷疑の時代なり、而して未だこの過渡期に入らざるの前に於ける一般の思想は、即ち明らかに唯物的にして、宗教は皆無、哲學は唯物論、而して倫理はホッブス、スペレサー、ベンザム、ミルの著書によりて其の功利主義を敎へられしなり、然るに先きに述べたる獨逸學の布植は恰かも此時に當り、如上の英國派の哲學は已でに其の極點に達し、漸次其頂點より下り行かんとするの運に向ひ居たる頃なりしなり、故に此後幾何ならずして保守的思想漸く思想界の表に頭を擡げ來り、國粹保存は稱導せられ、次いで日本主義は出で來つて世界主義の大勢に抗し、又次いで國家主義の出で來るあつて博愛平等の敎と相戰ひ、遙かに歐米諸國に個人主義のすたれて帝國主義の勃興せる氣運と相應じ、遂に今日思潮の一流をなせる我が帝國主義なるものとなれり。

而して保守的思想が斯くの如く滴々相集て溶々蕩々の勢を成さんとするの際、基督敎は世の疑問となり、特に其の敎育に對する一面に於て、其の衝突は論ぜられ、其の矛盾は痛說せらるゝあつて、愈々ます〳〵其の火の手を盛んならしめ、殆んど十年間の過渡時期は歐化と保守と、此の兩對流の思潮のかなたにも此方にも衝突し、廻旋し、狂奔しつゝありしなり。

之れよりして保守の思潮は獨逸學の日に布及せらるゝに從ひ、歐洲帝國主義の繁盛に伴ふて、滔々として其力を逞うし、更らに日清戰爭の結果として、國民の自覺心を起さしめ、思想は一般に反省的と

なりたるにより、一層其の勢力をして強大ならしめ、帝國を謳歌し、國史を謳歌し、國民の過去の道念を謳歌し、國家の將來の膨脹を謳歌したり。

而して其の過去を謳歌するものは武士道主義に入り、其の將來を謳歌するものは帝國主義を標榜するに至り、此の保守的反動よりして生起せる倫理主義は二つに分かれ、前者は個人的倫理に傾むき、後者は社會的倫理に向ふの有樣となり、前者は個人の情的統一に倫理の標準を見、後者は社會の利に於て之を見出すが故に、彼れは其主義の應援として東洋哲學と佛教とをやとひ來り、思想の方向漸く上に向ひたるに反し、此れは其主義の味方として現在の民心的膨脹を贊したるにより、彼れは漸く理想化し、此れは漸く現實化せんとするの傾きを生じ、兩思潮互ひに其適く所を異にするに至りたり。

然りと雖も彼等の正面の大敵は基督教主義なり、博愛主義なり、平等主義なり、歐化主義なり、彼等は共に力を一にして此大敵に當らざる可からず、是に於てか過渡期を經んとするの期に近くや否や、其鋭鋒は等しく此等の思想の上に加へられ、いよ〳〵進んで宗教學校の攻擊となり、繼子あつかひとなり、基督教は思潮の上に呼び出されて非常なる壓迫を被るに至りたり、而かも基督教徒の思潮に逆て務めしもの亦た甚だ有力なりき、彼等は日本を罵て小日本となし、國民性を卑みて島國根性となし、社會の階級を呪ろひ、時代の精神に禍ひあれと叫ぶに至り、此時まで潛伏し來りし基督教文學は援兵としてやとはれ、其獨得の呪詛的口吻は利用せられ、其得意の過境的樂天觀は鼓吹せしめられて、多樣多種なる不平慷慨の徒をして、等しく其の聲の鋭きに耳を傾けしめ、特に青年の不平兒をして其の

引力の下に集合せしめたるもの少なからず。

かくの如くにして學者とパリサイに相當せる保守敎と帝國主義とに迫害せられたる基督敎は、一は其の文學の布及により、一は其の反抗的氣運により、僻乎として平民の間に其徒を集むるに至りたり、且つ夫れ此時に當りてや、基督敎は他に同病相憐れむものを發見せり、これ即はち北人の思想なりき、北人は幕府たほれて南人元勳の天下となるや、雲井龍雄の輩によつて代表せられたる其の猛烈の野心を挫かれ、基督敎が思潮の表てにそびき出されて答たるゝが如く、彼等は長き間世の閥的制度に壓迫され、恨を呑んで南人の膝下に其の頭を垂れたりしなり、故に其の迫害の舞臺には兩者互に相異なりと雖も、其の悲劇のすちに至ては相同じきものあり、特に其沈痛の悲音を弄して南人の天下をのゝしり、其の淫蕩を責め其の收賄を罵る者、偶ま時勢の反動的分子を動かし、基督敎徒の同情をひき、更に理想の新社會を夢みつゝある彼等の思想感情は、いつしか歐米の社會主義の精神を誘ひ來り、現代の富豪制度を打破せんとし、基督敎主義と相待て平等博愛の一大社會を實現せんとするの熱誠ありしかば、兩々相助けて一は文學哲學の方面より保守敎の鋭鋒を迎へ、他は政治敎育の方面より帝國主義の急流に當らんとし、思潮界の混亂更らに甚だしきを加へたり。

特に今日は昔時と異なり、關門は開らけ、交通は頻繁となり、地の南北によりて明白に思潮の色を見分ること能はざるものあるが故に、思潮紛亂の情、容易に其の區別を見出し難く、其の對立の那邊に存するか疑はしきものあるが上に、事實は近く吾人に接して觀察の局所に偏するの恐れあり、動もすれば即ち自家の一時的多變的の思潮

を標準として時代精神を律せんとし、其の混亂爭鬪の衝點を看過せんとすること無きを保せず、從て實際の時代思潮は、其當時の個人の現在の意識に上りたるものよりも、其の動亂の度合必ず大なるものあるべきや明らかなり。

是に於てか吾人をして今試みに思潮廻旋奔流の上面に直立して暫く觀察の眼を放たしめよ。

輕くして表面を流るゝ淸浪あり、重くして裏面に沈みて走る暗黑の濁流あり、等しく時代精神といふと雖も、其の間に反對矛盾、競爭は暫くも絕ゆることなきなり、而してその浮びて流るゝ表面の小波は、政治的境遇と國民生活の情態と外界の事情とに一致し、若くは之に應化せる思想なり、其の沈みて流るゝものは之と反抗し將に崛起せんとして運動せる思想なり、前者は即ち狹義に於ける時代精神にして、後者は即ち時代精神の暗潮流なり、而して前者に屬するものは社會主義なり、これ思潮の社會に關しての方面なり、更らに其の純倫理的方面を見れば、前者に屬するものとしては保守教あり、後者に屬するものとしては基督教あり、而して思想の過渡期以前までは、此の形勢は全く反對なりしなり、即ち歐化主義は表面的にして、保守主義は裏面的なりしなり、然るに其の斯くの如き反動を來せるもの、一は學問の反省的となりて疑惑の過渡期に入りたると、二は征淸の結果外部より國民的自覺を引き起したるとに由るものにして、而して三十有餘年の今日までの間に漸々其の調和の道を作りつゝありしなり。

故に今日の日にありては、此等反對の兩對流は、互ひに相沿ふて時代思想の表てを横流しつゝあるなり、この調和の因は、また無論外

的のものあつて、金融界の復舊、國民生活の固定その一因たる可しと雖も、一方に於ては又た內的原因として、文學等純思想的のものの變遷が力を及ぼしたるによらずんばあらざるなり。

かくて國民は日に圓滿なる倫理主義によつて其の行爲を規定せられんとし、其の利己的唯物的なる劣等の思想感情は、新たに洗禮をうけて、克己復禮の德を中心とせる武士道主義と、純潔の直情を中心とせる基督教主義との調和に向はんとしつゝあるなり。其調和の何の日に實現せらるゝかは問題なり、其如何にして成遂げらるゝかも亦た問題なり、兎に角歐米の文化をうけて其の物質的文化に驚倒心醉せる時代は已でに去つて、反省的時代を過ぎ、今は其の精神的文化を同化せんとするの時期に向ひつゝあるなり。

是に於てか翻つて先きに國家の膨脹を謳歌し、誤つて其の時代思想

をも謳歌し、人間も社會も國家も、自家の膨脹繁榮をなすが善にして、活動は即ち德なりとし、自から帝國主義を標榜して得々として時勢の新氣運に乘じたる新思索家は、彼れの思索家としての立脚地を造るべく、其の主義を哲學化（フイロソフイズム）せる時に、彼れは天來の福音なるかの如くに、其の品格なき活動主義を以て新たなる倫理說となせり、天下の野心の兒は皆な之を賛せり、功名の青年も悉く其旗幟の下に集まれり、待合遊びをなす運動家は之によつて聖化せられぬ、收賄を爲す敏腕家は之によつて君子となれり、英雄色を好むてふ金言？は彼等の經典の大眼目となりぬ、而して社會の貧者、弱者、病者、劣敗者は彼等の爲す所に泣て頭をたれ、婦女子は其肉体をけがされ、其の容色を彼等が活動の手段とせらるゝに至り、社會は强者の專横に任かせ、其獸慾を充たさんが爲めに生存するの有樣となり、「正義

は弱者の口實なり」との慮語天外より落來て其の眞理たるを証明しぬ。

かくて俠兒の學びし俯觀的道德は根柢より打破せられ、之れと共に儒教の教へし仰上的の道德も亦た破壞せられぬ、故に彼等の往くところ、社會は宛然たるアミーバの社會にして、生存競爭の外、更らに何物も此世に存せざるの觀ありき。

而して斯くの如き一派の思想は獨逸の思想家たるニーチエの說を歡迎せざるを得ざるなり、ニーチエの說たるショーペンハウエルの哲學說に胚胎し、基督の教ふる所の如きは奴隷の教なりと罵倒し、我は主公たるの教を立つると大言して、其の性慾主義を稱導したるものなり。是の時に當て、利己的の紳士はハイカラーとなり、ハイカラーは一躍してニーチエ的哲學者となる、均しく快樂を以て最上

のものと爲したるの致す所のみ。

是に於てか吾人は當代社會の代表的人格の內容を觀察し得たり、いでや今日萌芽の運に向へる歐洲の精神的文明の同化につきて、其の將來の運命をトせんかな。

吾人はさきに我が國民の精神日に仰上的の進步を爲し、一時急足の進步をなせる國民生活を規定す可き新たなる倫理主義を立て、古き皮ぶくろにて盛ること能はざりし酒は、新たなる皮囊によりて保存せられんとするの運に向ひ、克己復禮の德を中心とせる武士道主義と、純潔の中情を主とせる基督教主義との調和、將に近きにあらんとすることを說述せり、而して基督教は歐洲文化の骨髓たるものにして、其の文學も、其の哲學も、其の社會的統制も、悉く基督教的精神によりて發現せられたるものなるが故に、今ま其の我國に於け

る將來の運命をトせんと欲せば、先づ我が國民性と歐洲文化との結合の樣を窺はざる可からざるなり、蓋し今ま假りに比喩を設けて其の理をいはゞ、我國家は一個の小兒にして、歐洲文化は之れに接觸し來り、之れを啓發せんと欲する外來の刺戟なるが故に、恰かも兒童に刺戟を與へて之を其の精神內容となさんとするには、敎師たるもの善く其の兒童の性質を知悉し、以て適宜の分量と方法とにて其手段を行はざる可からざるが如く、忽焉として我等を襲ひ來れる歐洲の文化は、之を適宜の敎材となすべく排列する善き敎師に待つことあるにあらずんば、或は其國民を苦ましめ、若くは過らしむることなしといふ可からず。

然るに國民が他國の文化をうけて敎化せらるゝ敎場內には、古來未だ一人の敎師だも在ることなきなり、たとへ先覺者といふものあつて、其の國民を警戒し、誘導することありといへども、畢竟彼自身もまた生徒の地位にあるを以て終に其國民の敎師たること能はざるは勿論なり、かくの如くに、何れの國民とても、みな裸体にて原野になげ出だされたる赤子の如くにて、自から經驗し、其經驗を敎師となして、而して自からを敎育せざるべからざるの已むなき運命を有するものなり、而して經驗を敎師とするは即ち國史を敎師とする所以にして、國史に敎へらるゝといふことは即ち自國の國民性を究めて外來文化の應化を見る所以にして、こは又た取りもなほさず其外來文化の自國に於ける將來をトする所以なればなり。

國民性を論結す

然らば我が國民性なるもの果して如何、吾人は上來記述せるところによりて其の意思に勝て智と情との寧ろ少しく之に對して後れたるの觀あるを見たり、吾人は其の負ぬ氣の喧嘩大將たるを見て其の大

思索家、大慈悲者たるを見ざりき、換言すれば武勇絶倫の海國男子たるを見てソクラテス、釋迦の如き性格を有するを見ざりき、然りと雖國民は幼にして義經秀吉の輩を好めるが如く、其理想とする所は常に溫情剛骨の士たるにありき、而かも其の溫情なるもの未だ釋迦の如き大觀念より湧出せる大慈悲をいふにあらざるなり、而して又た智略の卓越も國民の理想にして、史上智謀の士は男子の戰場に於ける、女子の文壇に於ける、比しく其の欣慕を惹くこと如何なる時代精神の下にありても根本より變動せしめらるゝことなかりきと雖も、これまたソクラテスの如き大智より來るの識見を稱するにあらざるなり、すべて國民は意志以外に於ては其の濃厚なるを好まざるなり、其言語の證明するが如くに其思索の興味は極めて淡泊に、其繪畫音樂の示すが如くに其の美情の性は極めて亦た淡泊なり、民族心理學の著者ルボンが、日本民族を以て中等の種族となし、文明史上未だ第二位を出る能はざるものとなせるは宜なりといふ可し、但しこは其の智と情との方面のことなり、意志に至ては之に反す、ルボンが日本國民を輕蔑して、國民の性格は容易に智力の如くに變易し進歩せしめ得るものならざるが故に日本國民の如きは今より幾世紀の積集を經るに非ざれば以て高等の種族となりて立身する能はざるものなりと爲せるは、之れ彼れが未だ我國民性を知らざるに座せる一大無禮の言なりといふ可く、事實は國史に其過誤を証明し、理論は人類學上また之を証するものあり。

日本國民は稜々の氣骨を有する海國の男子なり、其の氣骨より發する猛野の蠻臭は悉く山紫水明の裏に洗ひ清めたる國民なり、なほ其の傲岸自尊の念を花鳥風月の優艷なるによりて緩和せしめたる國民

なり、而して之れに蕩かされんとする度毎に文化の波濤國の四邊を打て其の惰眠を警められたる勤勉の民なり、而して偶ま勤勉刻苦して利を爭ふも割合に長く續かざる淡白の民なり、之かも又た富饒に驕りて淫蕩に走るも割合に暫時の間にして、長き坦々たる大道の地勢上作る可らざるが如く、平穩沈靜の夢生時代と淫蕩時代とは、暫時にして之に飽くの國民なり、生理上其身体の活動に適するが如く、其精神もまた活潑々地の狀を喜ぶの國民なり、彼は一蹴して敵をたほす人にして、長戰長爭の人にあらざるなり、革命的人格にして守成的人格にあらざるなり、其の氣質や、新奇單純、潔白、壯快を喜び、守舊、濃厚、暗黑、沈痛を憎むの民なり、其の時として保守懷古の情あるは其の實際にかゝる氣質あるを証せず、却て其の往古元始の代に祖先の朴素なる風牟を慕ふの証たり。

之を要するに日本國民の氣質は多血的膽汁質にして、三千年來の修養により、地理上の感化によつて、今日まで養ひ得たるものは、支那文明に情的方面を教へられ（支那接觸の條下に見よ）西洋文明に其の智的方面を教へられたるに止り、意的方面の卓越は依然として他の侵蝕を受けず、以て確固たる人格の統一を失はざるを得たり、勿論意志系統に偏して發達せる人格の、完全といふ可からざるが如く、國民意識に於ても亦た同樣の理あることなるを以て、彼我の長短は相補はんとの念を持して以て外來の文化に應化せざる可からずと雖も、然かも之れと共に國民本來の性得と此の性得上の修養によつて築き上げたる國民の根本精神は、飽くまでも之を眼中におくの要あるものとなす、これ余が此卷冒頭の言ある所以なり。

而して之れと同一の意義にて謳まれたる詩歌は、日本國民の口によ

りて傳へらるゝもの其の幾何なるを知らず、或は山にたとへ、或は水にたとへ、或は之を花木に譬へて國民性を謳歌せるもの、楚々たる其音、優に極端の歐化主義者をも感せしむるに足るものあり、若し眞に心を平にして世界諸國民の性情を觀察せば、理想的平和即ち道念に據れる平和を實現し得るもの獨り我民あるのみならん、其ゆへや如何に、他なし、義に感じ怨を挾むと我民の如きを見ざればなり、試みに歐洲國民の過半を見よ、其意志は消耗し盡きんとしつゝあるに非ずや、其の元氣は地に委せんとしつゝあるにあらずや、將た其の義膽はいかに、將た其の勇魂はいかに、若し歷史の吾人に示し來りし所を以て偶事ならずとせば、彼等の如くに物質的需要の滿足のみに熱中し、社會元氣の枯悴を顧みず、現在の階級に不滿と不平をいだき御儀式的宗教は以て未來の希望を與ふるに足らず、人慾

みつるの日は腐敗し、充たざるの日は或は無政府となり、或は專制を希望し。或は社會主義を生み、或は帝國主義を生むが如くに、日夜に自家の階級を氣にして慾望的生活の完成のみ之れ汲々とし、國史上の恩顧なく、血統上の連絡なく、素性の知れぬ曖昧ものと同居して、利己主義の上にクッツキ合ひをなせるやからこそ、終に其の民族の性格を墮落せしめ、纔かに軍制によつて民心の離散し反逆せんとするを防ぎ、法制教育によつて辛うじて其の共同生活を繼續し、文明の衰退を免がれんとするの運命に達し、其の只だ外部のみに幸福を發見せんとする民心の惡癖は、終に其の理想のかげも殘さず破壞し盡し、他の熱誠なる信仰を有せる國民に蹂躙せられ、智力進歩の結果として、却て其境遇の苦痛を增し、自由を求めんとして却て不自由の天罰を得、現時歐洲思想界に行はれ居るが如き厭世の思想

は、廣く下つて衆俗の盲目的情火に熱せられ、苦悶呻吟の聲、蚊の落日に向て泣くが如く、囂々として其國家の衰滅を弔ふに至るべきなれ、故に悲むべきは其貧にあらずして、貧をつぶやくの心なり、傷むべきは其の不遇にあらずして、之によつて將來の不遇を釀すの病心を生ずることなり、凡べて幸福とは現在目前の幸福にあらずして、却て之を生せしめ得可き元氣のことなり、快樂とは快を取り得可き元氣を一刺擊々々ごとに消費することにあらずして、却て之れを蓄積し得るやうに使用することなり、而して元氣は常に意志鍛練によつて養はる、人に報恩と復仇となくんば、即ち精神的死物たるが如く、國に勇魂義膽なくんば、理想の其生命を導くものなく、民は先づ精神的に滅亡すべし、智慧と財とは個人にも社會にも、無くてかなはぬものなれども、技術文學のごときものなくば、理想は

今日の日本は過渡期の日本となりといふの眞意

沒却されて其生活は機械の如くなるに止まるべし、凡べて成効は快活と元氣とにあるものにして、武士道を生み江戸俠兒を生みたる所謂る日本魂なるもの存する以上は、我國は能く外國文明を同化し、咀嚼し、以て其の光榮ある將來を迎ふることを得るものなり、之れ余が卷頭、祖先の建國的精神を讃美せる所以なり。

然りと雖も、吾人は何時までも古事紀萬葉集の如きを以て國民の行爲規定の標準とすること能はざるなり、ホーマーが何時までも希臘の經典たる能はずして、波斯に勝ちて勃興せる新國民的生活を規定し、其の新氣運に合せんが爲めには、暫くは詭辯家の時代を經過し、新たなる倫理主義を求めたりしが如く、我國と雖もまた遠からざる將來に於て、新たなる國民の倫理を構成せんとしつゝあるものなり、世人今日の日本を稱して過渡期の日本といふは、實は此の意に外な

新倫理主義は國民何に形成せりてらるゝかせり

其の新主義形成されしがれの時萬國の有般の如何なるらん

らず。

然り而して、斯くの如き新倫理主義なるものは、必ずや國民意識の統一を爲し來れる意志的方面の卓越と、歐洲文化の根本的精神との包合調和によつて成立するものならずんばあらざるなり、これ余が武士道と基督教主義との調和將に近きにあらんとすといふ所以なり。果して然らば、かくの如くして新たに興れる倫理主義の內容は如何、大体の上より之をいはゞ、即ちセミチック文明とインドユーロピヤンの文明と、而して我國民性との調和なり、些細に之を說述せば、即ち情の方面に於ては、先づ從來の如く力の感情を中心として成立せる利他的要素は、新たにセミチックの深沈純粹なる道德的感情を得て、其の道念を一層力强く、而かも溫和なるものとなし、更らにインドユーロピヤンの遊戲的にして快活なる氣風と相容れ、且つ其

の智的興味を得て、無分別の偏狹的道念と基督教の提供せるピューアハートとは、理性の下に完全なる活動を爲すの思慮分別ある道德的感情を生ずるに至るべく、又た道理に合はざれば思慮言動することなかれと敎へられたる儒敎の精神は、家族主義の氣風の下に相容れたるセミチックの人格的神の思想と相補ふて、更らに生々脈々の道德的熱情を傳へ、我が國初期の主觀的道德の、中ごろ客觀的制裁を受くるに至りしもの、今や更らに超越的なる道德の標準を得るに至り、偶像崇拜は跡を絕ちて、智識探求の興味は別に偉大なる宇宙的感懷(センチメント)を喚び起し來るべく、花鳥風月を畫きし繪畫は其の天然を寫實することの外に、其中に含まれたる哲理的の精神を寫し出し、音樂は公卿的戀愛を歌ふ代りに、天地と人間との愛着を歌ひ、古へ如來を彫みし彫刻は、セミチックの神の顯現をクリースの讃美せし天

然と人生との上にあらはさんとし、事變と情愛とを無意味に羅列せる小說は、全べて、人格の精神、事變の精神を表はし、其の裏に含まれたる結局論的意義を發展せんとするに至る可きなり、而して智的方面に於ては、いよ〳〵智的興味によつて吾人の祖父すら夢みざりし程の進步を爲し、從來天然を愛好して之を制馭するに力めざりし結果として智的發達の遙かに歐人の下にありしもの、今は地理上の變化に富み、生物の多種多樣なること世界に冠たる我が邦土を以て一大實驗場となし、遠からずして其研究の結論眞に世界を驚かすものを出すべく、かくて內にあつては舊來の敎權的分子は漸次に掃ひ去られて、之と同時に意志系統の卓絕せる人格の常例として、民は一々其の學者の理論を應用し、學者も亦た無味乾燥の哲理に偏せずして、人生を完全に研究せる哲學を出し、世界の哲學史上に一新生面を劃出するに至るべきなり、而して學問上に敎權的分子の一掃せらるゝが如く、政治上の思想に於ても閥的の傾向、專制の傾向、仰上的服從的の餘癖は、漸次消滅に歸し、之と共に其中に含まれたる美點は次第に發揮し來り、人道を仰で以て服從し、信仰の高尙鞏固たるもの相集て閥をなし、道德的制裁は團体の勢力によつて强固となり、社會主義の稱導する自由と平等とは、恩顧の念を中心とせる家族的なる社會的統制の下に實現せられ、帝國主義者の熱望せる國民的膨脹は、期せずして完成せられ、かくて此兩主義の理想的完全の實現は、遠からず民衆の精神的洗禮を受くるの日に當て、此地上に現はれ來るべきなり、是の時に當つてや外國文明の世界の大勢となつて我れにせまり來れるものは悉く之れを同化し、從來慈愛深かる天然の下に我儘勝手の餓鬼大將を働きし多くの天照らす日輪の

子等は、こゝに其の父祖の兄弟たりしもの、兒が齋らし來れる土產を得て、其の中に含まれたる教へを受け、新たに精神的洗禮を授けられて、其の繼續者、其の改良者、而して其の代表者として、其の齋らしたるものを更らに何れかの後繼者に讓るべく社會の舞臺に乘り出すの運に遭遇せるものなれば、我が國民は國史あつて以來、二千五百餘年の今日、初めて世界史上に其の最大の遺物をのこさんとし、渾圓球上の自家の天職を完うせんとする有爲大有爲の抱負を懷くべきの機に至りたりといふべきなり、此の時苟くも一個の國民たらんものゝ其の自覺、豈に夫れ大ならずして可ならんや。

然り而して、一旦歐洲文明を同化し了りたるの日に當てや、日本人てふ一個の人格は愈々完全のものとなり、其の卓越せし意志統一は更らに一層の大領域を劃するに至るべきを以て、國民性の最深要素

たる宗教も漸く複化(コムプリケーテッド)せられ來らざる可からず。故に祖先教として僅かに命脈をつなげる神道教は、既でに已でに日本が亞細亞大陸の文明に接觸せる時よりして其新たなる國民的生活を規定するに堪えざるものとなり、今まや社會の儀式的統制として其の形骸を存せるのみにして、また其の精神の民心に何等の影響感化を及ぼすを見ず、かくの如くにして排他的に祖國を讃美し、自尊の念に禍ひせられて文明の大勢に乘てられしもの、そが今日の運命なりとなす、之れ恰かもユダヤ人が自國の民のみを以て天の撰民となし、世界は國と國との生存競爭場なることを知らず、滅多無性に獨りヨガリを爲したる結果、國家は其の礎を失ひ、國の民等はさながら蜘蛛の子が巣を失ひたる如くに散り〳〵に分かれ、背て輕侮せる異端の國の寄生民となり、其の侮辱を忍ばざる可からざるに至れ

ると、正に好一對の例を爲し、一は政治的に他は宗教的に其の民の自尊偏狹の爲め離散したるが如き、相似て而かも其趣きを異にせるの結果を、生ずるに至りたると同理なり、宗教として抑もかくの如き結果を生じたるもの、これ其死に外ならず、蓋し宗教の制度は宗教の生命にあらずして、教祖の識見と人格とを除かば、餘は皆な死せる蟬殼の如きものなればなり、故に神道の如きは現在たゞ社會の一種の統制機關として存留するに止まり、宗教としての存在は已でに其終りを告げ、單に歴史的遺物として棚の隅に祭られ居るに過ぎざるなり、山崎闇齋の一時之を盛んならしめんと企てたるあり、平田篤胤の又た之れが中興の祖たらんとして盡力したる事ありたりと雖も、彼等は外來の文化と調和せしめんとはせで、却て之を包容せんと企てたるが爲めに、例へば小さき風呂敷もて大なる嵩を包まんとするが如く、其結果は却て其の破滅の運を速かならしめたるものなり、而かも彼等の意に以爲へらく、外國文明何かあらん、一擧して吾國教もて併呑せしむ可し、坐して其の侵蝕を受くべきにあらずと、思ふに彼等は神　の三韓を征し、時宗の蒙古を服したるが如くに、猛烈なる自家固有の敵愾心を以て外來の思想を見、初めより之を敵視し、冒頭より戰を宣告し、寛懷濶達の英人が、外來のものと握手して其の長所を次第に奪はんとするの度胸を缺き、速り男の、氣ばかりにて實の無き同化力を恃み、外來の思想を咀嚼せずして先づ併呑せんとしたりしものならんか。

而して今日の佛教なるものは、又た將さに神道と其の運命を一にせんとしつゝあるものなり、初め佛教は國民の新生活を規定せんが爲めに輸入せられ、一種族全体の性格を誘化するの一大宗教たらんと

したりしなり、然るに佛敎の餘りに幸運なる、彼れは宮廷に其根柢を据え始めたり、即ち一躍して御用宗敎となりたるなり、而して之れ却て其の死滅をいそぐ所以なりき、何となれば國民の情操と元氣とを養ふ可き目的を忘れて、漫然政治的勢力たらんとして汲々たりしを以てなり、かくて佛敎が蕩々として墮落し行き、國民の精神的敎養を爲す能はざるに至るや、日蓮親鸞の如き人物は各々其時代の精神に顧み、日本的佛敎を構成し、日蓮は其の時代の武士的氣風を皷吹するに効を奏し、親鸞は又其頃の直截簡明にして實行を主とする社會の氣風に乘じ、他力成佛の極端に走れり、爾來物移り星替り、歷史は已でに幾千頁を過ぎたれども、僧侶は少しも其の仰上的發達を遂げず、氣魄ある野心の徒は山僧として民の男女を掠かし、供養に眞面目なる平凡の輩は葬儀に侍して讀經をなすに過ぎず。

加旃、明治の今日となるに及んでや、時代精神を改良し興奮せしむべき彼等の天職は、不思議にも却て之れに感化せられ之れに腐敗沒德の福音を敎ふるの天職と變じ、時世を誘導せずして爭ふて之に媚び、貨殖に汲々として眼光現世を超越し得ず、陰々寂々たる山寺の裏面は世人の目を避くるに便にして、其の暗中快樂に淫蕩の情火をほしひまゝにし、一世の木釋たる可き大迦藍の高僧と雖も、其の裸然たる快樂主義を以て姦淫放逸の醜事を敎へ、其の無頓着なる利己主義を以て肉慾の樂園を說くに至つては、等しく亦た色界の餓鬼たり。

夫れ池水淀滯すること久しければ其腐敗も愈々甚だしきが如く、死蟬の殼と等しき生存を爲したること甚だ久しかりし佛敎は、今日に及んで古今未曾有の大腐敗を爲せり、かくの如くして佛敎の筆誅し

盡されざるもの抑も亦た僥倖のみ、蓋し文壇未だ道念燃ゆるが如き操觚者を出す能はず、よし出づといへども社會は詩歌的に其慷慨激越を多とするに過ぎざればなり、加ふに佛教の幸運なる、偶ま保守風の吹き來て東洋哲學は學界屬眸の燒點となるに及んでや、基督教未だ其の教義を研究するの好都合を附與せられざるに先だち、佛教は已でに大學に於て考究せられ、新教義を出し、新國民生活を規定せんとして著々其歩を進めつゝあり、而して一見不幸にも今日の佛教は神道の如くには、宮廷の保護を有せざるが故に、民間に在て其の喜捨を抑ぎ、其の同情を失はざらんとするの盡力を怠る能はず、惰眠の餘ながらも警戒は充分にし、勉勵は從來に倍して、日進の文運に後れざらんとし、世界文明の大勢に乘てられざらんと力めざるを得ざるを以て、却て其の好結果として、大學に於ける篤學の僧侶

の研究は歩を進め、佛徒一部の教育機關たる學林に於ける好學の青年は割合に覇氣に富み、基督教徒の宗教學校に於けるが如き、輕浮と、女性化と、都會風との弊害を免がれ、將來なほ其の頭腦を練磨せられて心胸を清化せしめられなば、却て有爲の望みあらんとすといふに至れり。

然りと雖も佛教も亦た畢竟古き皮囊のみ、以て清酒を盛るに堪えざるなり、即ち如何ほど研究せられたりとても、其原理に於て、其の精神に於て、到底二十世紀の國民的生活を規定し得ざるものなり、但し其のいよ〳〵研究せらるゝに從ひ、其の西洋哲學史の歸結を壓倒するほどの長所は次第に發揮され、其の研究は能く世界の哲學史上に一新生面をひらき、一新紀元を始むるに至らんとするものあり、即ち哲學としての貢献に至ては、將來必ず目ざましきものあらんか

なれども、宗教として民人日常の信念を左右すといふに至ては、吾人之に疑ひなき能はざるなり、然かし勿論、佛教が他に新たなる哲學を生み、其の人生觀が倫理の主義に影響して之れに少しの感觸を與へ、間接に人民の實行を規定することは無きにしもあらざるべし、思ふに倫理の主義は古へと異なり、後來に於ては哲學より下り來て演譯し出さるゝ産物にあらずして、他の諸科學の如くに倫理的事實に基づきて論結されざる可からざるもの、而して哲學は單に諸科學一切の研究結果を統括せるものに過ぎざるべきが故に、哲學より運動を始めて國民の行爲を規定すといふことは、漸次異例たらんとするの有樣を見るなり、これ余が佛教の將來は、能く研究の對象たり得れども而かも實行の標準たること能はずといふ所以なり。

且つ夫れ宗教の傳播は講學によるにあらずして教權によるものなり、

換言せば批評的に分析し學習して智的興味の媒介を得て後民心を服從せしむるものにあらずして、或る先入の固定觀念と融合せば回天の勢を以て情的熱狂の服從を喚起し來るものなりとす、げに多數の人民は悉く哲學者にあらざるを以て、一旦すたれたる宗教の講究は必ずしも其の宗教としての復活を意味せず、之に反して舊信仰地を拂ひて去り、新信仰を基礎とせる文明の外部より打寄せ來るの時にありては、此新信仰は理論によらずして傳說により、討究によらずして默示によつて、大多數の民の服從を致さしむるものなり、これ歷史の吾人に敎ふるところにして、佛教は漸々哲學としての大貢獻を爲すべく進み、基督教は之に代て國民の宗教とならんとすと論ずる所以なり。

かくて基督教は、歐洲文明の布及と共に民衆の間に漸々擴布せらる

ゝに至るの運命を有すると共に、又た其の教説の平易なること、其の初め貴族の間に傳道せられず却て下方より浸入し來りたること、は、いよ〳〵此の好運をして健全ならしめ、加ふるに其教ふる所の平等自由博愛の主義は、恰もよし下民の權利をして重からしむるものあるが故に、基督教は期せずして其の根柢を固うするに至るべく、其の文學は淫蕩の文字と無意味の美句とを文壇より一掃するに及んで愈々忠實なる基督教の保護者となり、音樂繪畫彫刻等一切の藝術に於て讃美せられ應用せられたる基督教的美點と精神とは、漸次傳説的勢力を成し、美的惝恍の念によりて何時とはなしに民心を基教化するに及び、今日基督教の有するが如き或る衒學的傳道師と小膽無節操の詐欺信者とはもはや無用有害のものとなり、來者は拒まず去者は追はずして、悠々たる閑天地に放吟するも、其の主義は無人

の野を行くの勢を以て世に擴まり、會堂はベルを鳴らすことなくして不言の桃李自ら其下に蹊をなすに類するものあらんとす、凡べて信望愛の中、信の一つこそ始めより終りに至るまで宗教の生命として存するものなるが故に、基督教徒は將來の好運を希望し、同胞を愛して之を救濟せんとするに全力を傾注することなく、靜かに安んじて獨り自から信を厚うせんとするに力めざるべからず、強いて同類を一時に網して其教義を張らんとするに至ては甚だしく不可なり、救世軍の如きは狂にあらずんば愚なりといふべし、只だ夫れ道念の高き、氣品の優れたる、而して其の衷情のすき渡れるが如く純潔なることによつて、自づから四隣を德化し、其の道義心より湧出する眞の勇氣を以て基教的觀念擴布の爲に私心なき犧牲献身を爲さんの偉丈夫のみ、能く傳道の効を奏す可きなり、余の如き、少時かゝる

基督教の衆ゆるす子と亡ぶる分子

人士に感化せられて、暫く眼を清教徒（ピューリタン）の自由天地に馳せ、余の蛇蝎視せる時代精神の中より遠離するを得たるものにして、不幸にも余の友たりし狡猾猿の如き信者と、年若きハイカラの傳道師との爲めに、更らに之を遠離するに至りたるものなり、斯くて余は、か弱き人間に強く大なる多くの望みを屬するの無益なるを悟り、無教會無牧師の獨立の信仰を懷き、幸に他人の毀譽を知らず、頭を哲學の疑問になやまして、以來、殆んど十星霜に垂んとする煩悶懷疑の年月の間、身は常に天の大任を成さんとの孟子が希望に充ち、翕然として孤獨を以て却て誇るべしと信ずるを得たりしなり。

然りと雖も余は基督教の教會に祝福あれと希ふものなり、特に目下或る教會にて行はれ居るが如き、凶事も吉事も其最寄り〳〵の信者一團結をなして之を救ひ合ふの社會組織に至つては、例へば江兒ッ

兒の間に今も其の美擧として稱せらるゝ一種の「親分政治」（之を湯屋の三助ばば屋の僕に喩き、又た日本橋の魚河岸組合に目擊せば興味あることならんと信ず）の如く、其の社會的感情と公共的良心と、任俠的意志とを發達する上に於ける効果、蓋し少小にあらざるべしと信ずるものなり。

要するに基督教徒の間に發達せる協會組織と、其の所謂クリスチャンホームとは、社會改良上學ぶ可き所少なからざるべし、總じて彼等の社會的事業に熱心にして、其の之に貢献するところ多きは喜ぶ可きとなり、但だ極端無分別の社會主義、無謀の自由平等說の附加し來るを惡むのみ、蓋し此等の傾向たるや一は狂熱心に皷吹されたる結果として、二には社會心理學上の一種の病的欲望として發生し來りたる厭惡す可き現象なるを以て、遠からずして具眼の士は悉く之を嗤て斥くるの日に到達すべきなり、且つ夫れ基督教は、武士道

の如き意志を尊重する保守敎の、利害較計の念を一掃し、中心の潔白を希ふの念と調和し、其の純情淡懷の敎義を以て、社會万民の外的幸福を幸福とせる一大誤謬の迷霧をひらき、之に內心の滿悅を與へ、驚喜（ヨロコビナヤアー）の外に銷魂（エクスタシー）の樂境あり、一時的情火の外に永劫消えざる情操の樂みといふものあるを知らしめ、人生は機械的の智的生活と、旨目的意志の葛藤的生活との外に、微妙なる崇高の生活を營み、現世の實相以外に超越の理想界に遊ばんとするものなることを悟らしめんとして、我が國民の思想に其の根を生じたるものなるが故に、此敎義にして傳播せられんか、之れに伴隨し來れる厭ふべき分子は、却て掃蕩し盡さるゝに及び、基督敎は日本に入り、先づ意志的分子を得て日本化すると共に、他の邦土に見るべからざりし醇化作用を受け、無形偉大の洗禮を授けらるゝに至るべきなり、是時に當てや、

基督敎は一個濶達なる宗敎となり、其の耶蘇臭き分子は消滅し、其神は尊ぶ可き個性人格の理想化に過ぎずとせられ、耶蘇は社會改良家としての偉大の道德的人物とせられ、其の事業は先づ偏頗にして冷然たる人生觀を溫醇玉の如くにし、其の家族主義に基ける神人觀によつて安心立命を情的統一の理想境（所謂神の國これなり）に於て求めしめんとしたるに外ならずと信ぜらるゝに至るべく、從て煩はしき中世紀の愚論たる三位一躰說は今や顧るの人だになく、下民に行はるゝ舊敎、一般に擴がれる新敎、所謂學者に贊成せらるゝ自由信敎、これら一切の輸入物は、古きも新らしきも日本に入ては皆な均しく「開化史的段階として授けられたる社會的宗敎々化の一單元」たるに止まり、恰かも百川の大海に注ぐが如く、嘗て歐洲に「騎士」を生じたる「基督の生ける精神に由り、將に日本に「武士」を改造

せんとする日本的基督教に向て悉く流歸し了らんとすなるべし。

百二十六

思想の日本 終

明治三十九年九月十五日印刷
明治三十九年九月十八日發行

定價金二十錢

著者　天涙居士

發行者　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　福永文之助

印刷者　横濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉

發行所　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　警醒社書店

印刷所　横濱市山下町八十一番地　福音印刷合資會社

不許複製

せんとする日本的基督教に向て悉く流歸し了らんとすなるべし。

百二十六

思想の日本 終

明治三十九年九月十五日印刷
明治三十九年九月十八日發行

定價金二十錢

著者　天涙居士

發行者　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　福永文之助

印刷者　横濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉

發行所　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　警醒社書店

印刷所　横濱市山下町八十一番地　福音印刷合資會社

不許複製

中村春雨君著

人の母

定價 五十錢
郵稅 六錢

穩健な**着想**靈妙なる筆力、運命に掀飜せらるゝ人生の徑路を寫して、**暗涙の中**に燃灼たる**光明を認む**籠き**信仰**と、溫き**同情**に慰められんとする者は本書を讀め。一部の『人の母』は春雨先生米國留學の産土產也。

大隈重信伯序。島田三郎君序。松村介石君序。伊澤修二君序
酒井勝軍君著

教育と音樂

定價 卅五錢
郵稅 六錢

音樂者として世に知られたる著者は茲に始めて其の抱負の一端を公表せられたり先づ教育の本義につきては極めて痛快斬新なる說明を試み次に音樂の本義に及びては革命的の大定義を下し更に進んで教育を普通及特別に二分し又之を細別して一々音樂との關係を明示したる實に近來得難きの好著にして教育家、音樂家は勿論其の他苟も新智識によりて社會に活動せんとする人士は必ず一讀せざるべからざるのみならず卷末『婦人と音樂』なる附錄に到りては文明的婦人の正さに深慮すべきの大文字。

海老名彈正君序。松村介石君序。永島忠重君編

蕃山拾葉

定價 三十五錢
郵稅 四錢

英雄儒熊澤蕃山子、遺すところの訓戒說論百六拾餘篇を收む、其卓越せる識見と、超凡なる人格とは、以て萬世の師表と爲すに足るべく、其時代を超絕して千歲に貫くの大精神は、以て國民の誇りとするに足るべし、若し善く此書を讀む者は、必らず得るところ大なる者あらん。

エール大學教授 スニース博士著
マスター、チブ、アーツ 中村長之助君譯

テニソンの思想

定價 三十五錢
郵稅 四錢

本書はエール大學教授スニース博士によりて詩聖テニソンが長き一生の間歌ひ續けたる其詩才の淵源は神聖にして畏敬すべき者なりとの自證を分析せられたる The mind of Tennyson を邦語に紹介せられたるものにして「神」「自由意志」「靈性不滅」等の諸問題に對する詩聖の根本思想に觸着せんと欲する者は來りて本書の內容に接せよ。

97
385

植村正久君編輯主任　田中達君譯　オーア博士著

神學叢書　第二

基督教世界觀

定價金壹圓三十錢
小包料金十五錢

オーア博士は蘇國グラスゴー大學組織神學教授にして英米神學界に雷名轟々たるは普く人の知る所而して本書は氏が傑作中の一に算すべき名著なるは初版以來已に七版を重ねしにても知らるべし基督教教義の全般に亘り引證該博論斷的確何事につけても曖昧模稜の點なし庶幾くは我宗教界に行はるゝ幾多の疑難之に依りて解釋せらるゝを得んか

山路愛山君著

基督教評論

〔現代日本教會史論〕〔耶蘇傳管見〕

定價五十錢
郵稅　六錢

第二十世期は基督教思想の革命時代にして日本に取りては獨立的に基督教を研究すべき最も緊要なる時機に際せり本書は則ち此思想界の問題に於ける著者の觀察を直に披瀝したる者に過ぎず卷末著者の奇拔なる耶蘇傳管見を添ゆ

97
38

007898-000-0

97-385

思想の日本

高橋　天涙／著

M39

AAA-0068